301
40

訳全芥子園畫傳

第一

始

全譯

491

芥子園畫傳

第一冊

總說

301
40

小杉放庵 註解
公田連太郎 譯文

全譯

莊子畫傳

第一冊 總說

東京アトリエ社刊行

昭和一〇・五・五 帝國圖書

30140

緒言

芥子園畫傳は南畫道の寶典である、素人も此一書あれば、畫を作り易く、畫を觀、畫を論ずるに便であり、專門作家に取つては、まことに調法極まる參考書である、たゞ、餘りに調法なるが爲に、或は是に賴るに過ぎて、多少の弊を受くる場合無きにしもあらず、幕末明治初期の南畫の振はざりし所以、一部の因子は此處に存する、事ほどさやうに、此の書の力を思ふべきだ、書に罪なく書を見る者に過ちがある、此の用意を以て此書に對し參酌よろしきを得ば、古人の所論、古人の技法、南畫道の精神について、得る所決して少々ならずと思はれる、人名、術語等について、解釋を詳細にしたることは、我等のいさゝか努めたりとなす點である。

公田連太郎
小杉放庵

例言

一、本書は、中村不折氏所藏の康熙及乾隆版の芥子園畫傳の原本より、直接複製、全譯せるもの、譯譯に當つては、出來得る限り種々の刊本と照合し、最も正確を期したつもりである。

一、原文に、句讀點、反點を附すると共に、【譯】【註】【解】の三段に分ちて、解釋には、ほゞ遺憾なきを期したいと努力したが、なほ、幾分の不備無きを保し難い。この點は他日の完成に俟つより他はない。尙、序文その他この類のものには【解】を略した。また、欄外の【解】の中、卷末にまとめた分には、それぞれ頁數を記入して置いたから、それに依つて參照せられたい。

一、【譯】【註】特に【解】に依つて、大體の論旨を一讀了解出來るやう便にしてあるとはいへ、讀者は、寧ろ、それらを參考として、飜つて、原文を味讀されんことが望ましい。

一、原本の圖版中、名家畫譜には處々に彩色が施してあり古版畫としても、實に卓越せるものであるが、鑑賞本位でない本譯では、すべて一色でこれを示すことにした。尙、圖版中、左右に空白のあるものがあるが、これは、原本が、第一集、第二集、第三集と、各々別々の時期に別々の形式で刊行されたもの故、本書の如く全卷の形式を統一せる場合には止むを得ぬところである。讀者幸ひにこれを諒せよ。

序

今人愛眞山水。與畫山水無異也。當其屏障列前。幀冊盈几。而彼崢嶸遐曠。峰翠欲流。泉聲若答。時而烟雲晻靄。時而景物清和。宛然置身於一丘一壑之間。不必蠟屐扶筇。而已有登臨之樂。獨是觀人畫。猶不若其自能畫。人畫之妙從外入。自畫之妙由心出。其所契於山水之淺深。必有間矣。余生平愛山水。但能觀人畫。而不能自爲畫。間嘗舟車所至。不乏摩詰長康之流。降心問道。多蹙頞曰。此道可以意會。難以形傳。予甚爲不解。今一病經年。不能出遊。坐臥斗室。屏絕人事。猶幸湖山在我几席。寢食披對。頗得臥遊之樂。因署一聯云。盡收城郭歸檐下。全貯湖山在目中。獨恨不能爲之寫照以當枚生七發。因語家倩因伯曰。繪圖一事相傳久矣。奈何人物翎毛花卉諸品。皆有寫生佳譜。至山水一途。獨泯泯無傳。豈畫山水之法。洵可意會。不

可形傳耶。抑畫家自秘其傳。不以公世耶。因伯遂出一冊。謂予曰。是先世所遺。相傳已久。予見而奇之。細爲玩賞。委曲詳盡。無體不備。如出數十人之手。其行間標釋書法。多似吾家長蘅手筆。及覽末幅。得李氏家藏。及流芳印記。益信爲長蘅舊物云。但此係家藏祕本。隨意點染。未有倫次。難以啓示後學耳。因伯又出一帙。笑謂予曰。向居金陵芥子園時。已囑王子安節。增輯編次久矣。迄今三易寒暑。始獲竣事。予急把玩。不禁擊節。有觀止之嘆。計此圖原帙凡四十三頁。若爲分枝。若爲點葉。若爲巒頭。若爲水口。與夫坡石橋道宮室舟車。瑣細要法。無不畢具。安節於讀書之暇。分類仿摹。補其不逮。廣爲百三十三頁。更爲上窮歷代。近輯名流。彙諸家所長。得全圖四十頁。爲初學宗式。其間用墨先後。渲染濃淡。配合遠近諸法。莫不較若列眉。依其法以成畫。則向之全貯目中者。今可出之腕下矣。有是不可磨滅之奇書。而不以公世。豈非天地間一大缺陷事哉。急命付梓。俾世之愛眞山水者。皆有畫山水之樂。不必居畫師之名。而已得虎頭之實。所謂咫尺應須論萬里者。其爲臥遊。不亦遠乎。時康熙十有八年。歲次己未。長至後三日。湖上笠翁李漁。題於吳山之層園。

【譯】今人、眞山水を愛すること、畫山水を愛すると異なる無きなり。其の屏障、前に列し、幀冊、几に盈つるに當りては、彼の崢嶸退曠にして、峰翠、流れんと欲し、泉聲、答ふるが若く、時としては烟雲晻靄し、時としては景物清和にして、宛然として身を一丘一壑の間に置く。必ずしも屐に蠟し筇に扶けられずして、已に登臨の樂有り。獨り是れ人の畫を觀るのみなり。猶ほ其の自ら能く畫くに若かず。人の畫の妙は外より入り、自ら畫くの妙は心より出づ。其の山水に契する所の淺深、必ず間有り。余、生平、山水を愛す。但だ能く人の畫を觀て、自ら畫を爲すこと能はず。間ま嘗て舟車の至る所、摩詰・長康の流に乏しからざれば、心を降して道を問ふ。多くは頷を蹙めて曰く、此道は意を以て會す可く、形を以て傳へ難しと。予甚だ解せずと爲す。今、一たび病んで年を經、出遊すること能はず、斗室に坐臥し、人事を屏絶す。猶ほ幸に湖山我が几席に在り、寢食に披對し、頗る臥遊の樂を得たり。因つて一聯を署して云ふ、盡く城郭を收めて檐下に歸し、全く湖山を貯へて目中に在りと。獨り恨むらくは之が爲めに寫照して以て枚生の七發に當ること能はざるを。因つて家倩因伯に語りて曰く、繪圖の一事、相傳ふること久し。奈何せん人物翎毛花卉の諸品は、皆、寫生の佳譜有れども、山水の一途に至つては、獨り泯泯として傳ふる無きを。豈に山水を畫くの法は、洵に意會す可くして、形

傳す可からざるか。抑も畫家自ら其傳を秘して、以て世に公にせざるかと。因伯遂に一冊を出して、予に謂つて曰く、是れ先世の遺す所にして、相傳ふること已に久しと。予見て之を奇とし、細に爲めに玩賞するに、委曲詳盡にして、體として備はらざる無く、數十人の手に出づるが如し。其行間の標釋の書法は多く吾が家の長蘭の手筆に似たり。末幅を覽るに及びて、李氏家藏及び流芳の印記を得たり。益〻長蘭の舊物たるを信ずと云ふ。但だ此れ家藏の秘本に係り、隨意に點染して、未だ倫次有らず、以て後學に啓示し難きのみ。因伯又一帙を出し、笑つて予に謂つて曰く、向に金陵の芥子園に居る時、已に王子安節に囑して、增輯編次すること久し。今に迄りて三たび寒暑を易へて、始めて事を竣るを獲たりと。予急に把玩し、擊節するに禁へず、觀止の嘆有り。計るに此圖は原帙凡そ四十三頁、若しくは分枝と爲し、若しくは點葉と爲し、若しくは髓頭と爲し、若しくは水口と爲し、夫の坡石橋道宮室舟車と、瑣細の要法まで、畢く具はらざる無し。安節、讀書の暇に於て、類を分ちて仿摹し、其の逮ばざるを補ひ、廣めて百三十三頁と爲す。更に爲めに上は歷代を窮め、近くは名流を輯め、諸家の長ずる所を彙め、全圖四十頁を得て、初學の宗式と爲す。其間、用墨の先後、渲染の濃淡、配合遠近の諸法、較として列眉の若くならざる莫し。其法に依りて以て畫を成さば、則ち向の全く目中に貯ふる者、今、之を腕下に出す可し。是の磨滅す可からざるの奇觀有りて、而も以て世に公にせざるは、豈に天地間の一大缺陷の事に非ずや。急に命じて梓に付せしめ、世の眞山水を愛する者をして、皆、山水を畫くの樂有り、必ずしも畫師の名に居らずして、已に虎頭の實を得しむ。謂はゆる咫尺に應に須く萬里を論ずべき者なり。其の臥遊たること、亦遠からずや。時に康熙十有八年、歲、己未に次る、長至の後三日、湖上の笠翁李漁、吳山の層園に題す。

【註】 此序は、李笠翁が康熙十八年に王安節の編輯せる芥子園畫傳を刊行するに至りし由來を述べたものである。但しこれは第一集のみに就いてのものであり、從つて山水畫のみに就いて述べて居るのである。第二集及び第三集は、康熙四十年のもので、李笠翁の歿後に刊行されたものであつて、王安節はそれに關係あれども、李笠翁はそれを見たことは無いのである。先づ此事を知つて置かぬと、此序文は解し難いのである。○屏障、屏風の類、これに山水を畫きてあるなり。○幀冊、畫幅と畫帖。○峥嶸、山の高くけはしきさま。○遐曠、遠くしてひろ〳〵としたること。○峰翠、山峰のみどりなる色。○烟雲晻靄、烟や雲の立ちこめたるをいふ。楚辭に、揚〻雲霓之晻靄とあり。○景物、風景なり。○宛然、恰も。○一丘一壑、山水の間の意。隱者の處る所の地なり。世說に、晉の明帝、謝琨に問うて曰く、君自ら謂ふに庾亮と何如と。答へて曰く、廟堂に端委して、百僚をして準則せしむるは、臣、亮に如かず。一丘一壑は、自ら謂へらく之に過ぎたりと。○蠟屐、屐物に蠟を塗りて光澤有らしむるなり。晉書に、阮孚、性、屐を好む。阮に詣るもの有り、正に自ら屐に蠟ぬるを見る、とあり。○筇、杖なり。○登臨、高きに登り下きに臨むなり。高き山に登ること。○契、契合なり。心持のぴつたり合ふこと。○舟車所至、舟や車で行かれる所。中庸に出づ。○摩詰長康、唐の王維と晉の顧愷之。本文の註に詳かなり。○蹙頞、眉間に皺をよせる。孟子に出づ。○會、會得すること。○斗室、至つて小なる室をいふ。黃庭堅の詩に斗室何來豹脚蚊とあり○屏絕、しりぞけ絕つ。屏絕人事とは、人と往來せざるをいふ。○湖山、湖と山○披對、開きて對して觀るなり。○臥遊、臥しながら其地に遊ぶこと。南史に、宗炳、字は少

文、山水を好み、遠游を愛し、西のかた荊巫に陟り、南は衡岳に登る。疾有りて江陵に還り、歎じて曰く、老疾俱に至り、名山恐らくは徧く覩難からん。唯だ當に懷を澄まし道を觀、臥して以て之に游ぶべしと。凡そ游履する所、皆、之を室に圖し、人に謂つて曰く、琴を撫し操を動かし、衆山をして皆響かしめんと欲すと。○盡收城郭歸檐下。全貯湖山在目中。諸處の城郭を殘らず我が家の簷の下に收め、諸方の山水の風景を殘らず我が目の中に貯へて居る、との意。○枚生七發、漢の枚乘、字は叔、漢の淮陰の人なり。初め吳王濞の郎中令と爲る。吳王反す。乘諫むれども聽かず。乃ち梁の孝王に事ふ。孝王薨せし後、入りて武帝に事ふ。嘗て七發を作る。其結末に云はく、太子、几に據りて起きて曰く、渙乎として一に聖人辯士の言を聽くが若く、涊然として汗出で、霍然として病已えぬと。七發は文選に載つて居る。○家倩、我が家の女壻。○因伯、沈心友、字は因伯、西冷と號し、又、克菴と號す。乃ち笠翁の壻なり。芥子園畫傳第一集は、沈因伯が其の藏する所の李長蘅の畫譜を本として、王安節をして增補編輯せしめし者を、李笠翁が印行せしめし者なること、下文に記する所なり。○標釋、標題と解釋○長蘅、明の李流芳、字は長蘅、檀園と號す。嘉定の人、常熟に居る。萬曆丙午、孝廉に擧げられ、再び公車に上れども第せず、遂に意を進取に絕つ。性、佳山水を好み、尤も詩酒を放にし、筆墨淋漓として揮灑す。畫、元人に出入し、尤も吳仲圭を好む。萬曆乙亥生れ、崇正己巳卒す、年五十有五。檀園集を著はす。○倫次、順序。○金陵、今の江蘇省金陵道江寧縣、卽ち南京なり。○芥子園、李笠翁の別莊にして、金陵に在り。笠翁一家言雜聯下に曰く、此れ余が金陵の別業なり。地、一丘に止まる。故に芥子と名づく。其の微なるを狀する也。往來する諸公、其の稍や丘壑を具ふるを見て謂はく、芥子に須彌を容るの義を取ると。

其れ然り、豈に其れ然らんやと。○王子安節、清の王概、初の名は改本、字は安節、秀水の人にして、金陵に家す。山水は龔賢を學び、人物も亦妙なり。間ま大幅の松石を作る。詩文を善くし、澄心堂紙賦有り、稱せらる。兄弟、皆、篤行にして古を嗜み、旁ら詩畫に及び、名を時に擅にす。○擊節、贊美すること。樂器の綽板にして、之を擊ちて他の樂器或は歌曲と相應和する者なり。又、他人の詩文を贊美するを、擊節稱賞と曰ふ。當に擊指の義と爲すべし。掌を鼓し髀を拊ちて、意を得たるを表示するが如きなり。○觀止、此上の物無きをいふ。見る所の者、善を盡し美を盡し、以て復た加ふる無きを言ふなり。左傳に、吳の季札、樂を魯に觀、韶箾の舞に至りて曰く、觀止まれり。若し他の樂有りとも、吾敢て請はずと。○四十三頁、頁は葉の義、枚といふが如し。○仿摹、摸寫すること。仿は倣と同じ。○宗式、宗師とする法式。手本の意。○較、明かなること。○畫師、畫に工なる者の稱。唐書閻立本傳に、太宗、侍臣と、舟を春苑池に泛べ、異鳥の波上に容與たるを見、上、之を悅び、立本を召して之を畫かしむ。閫外、畫師立本と傳呼す。立本、羞恨して汗を流す。とあり。○虎頭、顧愷之の幼名。○咫尺應須論萬里、咫は八寸、尺は一尺。小さき畫面に萬里の景を寫し出せるをいふ。杜詩に尤工遠勢古莫比、咫尺應須論萬里とあるを引用す。○康熙十八年、清の聖祖の時、皇紀二三三九年、西紀一六七九年。○長至、此語はまことに困る語で、冬至にも夏至にも用ひられる。影の最も長い意味で冬至にも用ひられ（太平御覽）、日の最も長い意味で夏至にも用ひられる（禮記月令）ので、李笠翁の學風をもつと善く知らねば、いづれとも明瞭には分らぬが、多分冬至のことであらうと思ふ。因に記す冬至は、日の最も短い時の意味で短至とも云ふ。○李漁、明末清初の小說戲曲作家、浙江の人、名は漁、蓑笠して

自ら江湖に漁せんとて、笠翁と號す。萬曆の末に生れ、明清革命の際に當りて、意を仕進に絶ち、明の遺臣を以て自ら居り、小說戲曲を述作して鬱物せる氣を吐けり。天下を周遊し、晚年、南京に住して終る。年七十餘。其著、笠翁十二樓、笠翁十種曲、笠翁一家言全集あり

芥子園畫傳第一冊總說目錄

畫學淺說 論畫十八則……一三

六法……一九
六要……二〇
六長……二〇
三病……二三
十二忌……二四
三品……二六
分宗……三〇
重品……三三
成家……三六
能變……三八

計皴……四一
釋名……四三
用筆……四八
用墨……五六
重潤宣染……五八
天地位置……六四
破邪……六七
去俗……六八

設色各法 二十七則……七〇

石青……七四
石綠……七七

朱砂……八〇
銀硃……八一
珊瑚末……八二
雄黃……八三
石黃……八三
乳金……八五
傅粉……八七
調脂……八九
藤黃……九〇
靛花……九二
草綠……九五
赭石……九五
赭黃色……九六
老紅色……九七
蒼綠色……九八
和墨……九八
絹素……一〇一
礬法……一〇四
紙片……一八〇
點苔……一一〇
落款……一一三
煉礫……一一三
洗粉……一一四
措金……一一四
礬金……一一五

青在堂畫學淺說

鹿柴氏曰。論畫或尙繁。或尙簡。繁非也。簡非也。或謂之易。或謂之難。難非也。易亦非也。或貴有法。或貴無法。無法非也。終於有法。更非也。惟先矩度森嚴。而後超神盡變。有法之極。歸於無法。如顧長康之丹粉灑落。應手而生綺草。韓幹之乘黃獨擅。請畫而來。神明。則有法可。無法亦可。惟先埋筆成塚。研鐵如泥。十日一水。五日一石。而後嘉陵山水。李思訓屢月始成。吳道元一夕斷手。則曰難可。曰易亦可。惟胸貯五岳。目無全牛。讀萬卷書。行萬里道。馳突董巨之藩籬。直躋顧鄭之堂奧。若倪雲林之師右丞。山飛泉立。而爲水淨林空。若郭恕先之紙鳶放線。一掃數丈。而爲臺閣。牛毛繭絲。則繁亦可。簡亦未始不可。然欲無法。必先有法。欲易先難。欲練筆簡淨。必入手繁縟。六法。六要。六長。三病。十二忌。蓋可忽乎哉。

【譯】鹿柴氏曰く、畫を論ずるに或は繁を尙び、或は簡を尙ぶ。繁も非なり、簡も非なり。或は之を易しと謂ひ、或は之を難しと謂ふ。難きも非なり、易きも亦非なり。或は法有るを貴び、或は法無きを貴ぶ。法無きは非なり、法有るに終るは更に非なり。惟だ先づ矩度森嚴にして、而して後に神を超え變を盡し、

法有るの極、法無きに歸す。顧長康の丹粉灑落にして、手に應じて綺草を生じ、韓幹の乘黃獨り擅にし、畫を請うて神明を來すが如きは、則ち法有るも可なり、法無きも亦可なり。惟だ先づ筆を埋めて塚を成し、鐵を研りて泥の如くなれ。十日に一水、五日に一石、而して後に嘉陵の山水、李思訓は屢月にして始めて成り、吳道元は一夕にして手を斷つは、則ち難しと曰ふも可なり、易しと曰ふも亦可なり。惟だ胸に五岳を貯へ、目に全牛無く、萬卷の書を讀み、萬里の路を行き、馳せて董巨の藩籬を突き、直に顧鄭の堂奧に躋れ。倪雲林が右丞の山飛び泉立つを師とし、而して水淨く林空しきを爲すが若き、郭恕先が紙鳶に線を放つには、一掃數丈にして、而して臺閣を爲るには、牛毛繭絲なるが若きは、則ち繁も亦可なり、簡も亦未だ始より可ならずんばあらず。然れども法無からんことを欲せば、必ず先づ法有れ。易きを欲せば難きを先にせよ。練筆の簡淨ならんことを欲せば、必ず入手繁縟なれ。六法、六要、六長、三病、十二忌は、蓋し忽せにす可けんや。

【註】青在堂、鹿柴氏、皆、王安節の別號なり。○矩度、法式。○森嚴、嚴正なること。○超神盡變、變化自在なること。○顧長康、晉の顧愷之、字は長康。博學にして才氣有り、尤も丹青を善くす。嘗て桓溫及び殷仲堪の參軍と爲る。謝安深く之を器重す。人を畫くに睛を點ぜずして曰く、神を傳ふるは正に阿堵の中に在りと。時に稱す、愷之、三絕有り、才絕、畫絕、癡絕と。幼名は虎頭、人　顧虎頭と稱す。○丹粉、彩色。○綺草、美しき草。花卉をいふ。○韓幹、唐の藍田の人、玄宗の時、供奉太府寺丞たり。善く人物を寫す。尤も鞍馬に工なり。始め曹霸を師とす。後獨り其能を擅にす。詔して陳閎を以て師と爲さしむ。

幹從はずして曰く、臣自ら師有り、陛下の內厩の馬は、皆、臣が師なりと。上甚だ之を異とす。○乘黃は內厩の馬の名。○請畫而來神明、遊生八牋に云ふ、韓幹の畫馬、神人來り索むと。○埋筆成塚、尙書故實に云ふ、僧智永、積年、書を學び、禿筆頭十甕有り、之を埋めて退筆塚と號すと。○研鐵、桑維翰の故事に本づく。桑維翰、初め進士に擧げらる。主司、其姓を惡み、以爲へらく、桑と喪と同音なりと。人、其の他に從つて仕を求めんことを勸むる者有り。維翰慨然として、乃ち鐵硯を鑄て以て人に示して曰く、硯弊れなば則ち改めて他に仕へんと。卒に進士を以て及第す。○十日一水五日一石、杜詩に、十日畫一水、五日畫一石、能事不受相促迫とあるに本づく。○嘉陵、嘉陵江は、今の四川省嘉陵道に在り、山水奇絕、天下の勝境なり。○李思訓、唐の宗室、開元の初、彭國公に封せらる。善く金碧山水を畫き、筆格遒勁なり。時の人、其の左武衛將軍たるを以て、李將軍と稱す。北宗の祖たり。子昭道も亦、山水を以て名有り、時に小李將軍と稱す。○屢月、數月を經過するをいふ。○吳道元、唐の陽翟の人、字は道子、繪事を善くし、筆法超妙にして、畫聖と稱せらる。玄宗の時、召し入れて供奉たらしむ。玄宗、嘉陵江の景を思ひ、道元をして往きて貌を寫さしむ。回る日に及びて、帝、其狀を問ふ。奏して曰はく、臣、粉本無し、並に記して心に在りと。後、宣して大同殿に於て之を圖せしむ。嘉陵江の三百餘里の山水、一日にして畢る。時に李思訓有り、山水に名を擅にす。帝、亦、宣して思訓をして大同殿に於て圖せしむ。月を累ねて方に畢る。玄宗曰く、李思訓の數月の功、吳道元の一日の迹、皆、其妙を極むと。○斷手、畫き畢るをいふ。○五岳、支那の代表的の名山、中央は嵩山、東方は泰山、西方は華山、南方は衡山、北方は恆

山。○目無全牛、莊子の養生主篇に、庖丁曰く、始め臣が牛を解くの時、見る所、牛に非ざる者無し。三年の後、未だ嘗て全牛を見ざるなりと、とあるに本づく。筆を用ふること自在なるに喩ふ。○讀萬卷書行萬里路、董文敏云ふ、萬卷の書を讀まず、萬里の路を行かざれば、畫祖と作る可からずと。○董巨、董源と巨然。董源は宋の畫家、江南鍾陵の人、字は叔達、又字は北苑、南唐の時、後苑副使と爲る。善く秋風遠景を畫き、多く奇峭の筆を以て江南の諸山を寫す。水墨は王維に類し、著色は李思訓の如し。荆關の後、源最も著はる。巨然は南唐の畫僧、江寧の人、業を本郡の開元寺に受く。山水を畫くに工なり。李煜、宋に降るとき、隨つて京師に至り、開寶寺に居り、聲譽日に起る。山水は董源を師とし、其妙に臻る。時に稱す、前に荆關有り、後に董巨有りと。○顧鄭、顧愷之と鄭法士。鄭法士は、隋人、畫く所、氣韻標舉、風格遒勁なり。江左、僧繇より以降、鄭君、獨步と稱せらる。○倪雲林、倪瓚は、元の無錫の人、字は元鎭、雲林と號す。明初、之を召せども起たず。人、無錫高士と號す。善く山水を畫く。天眞幽淡を以て宗と爲す。○王右丞、王維は唐の大原の人、字は摩詰、玄宗の時、官尙書右丞たり。世、王右丞と稱す。詩に工に書畫を善くす。時に稱す、詩中に畫有り、畫中に詩有りと。畫家南宗の祖と爲す。○山飛泉立、畫山水の生動せるをいふ。○郭恕先、郭忠恕は、宋の洛陽の人、字は恕先、太宗召して國子監主簿と爲す。畫は關仝を師とし、又、書を善くす。人、一疋の素絹を致す者有り、忠恕爲めに小童を畫き、線車を持ち、紙鳶より線を引くこと數丈にして、之を滿たす。○一掃、一筆。○牛毛繭絲、牛の毛の如く繭の絲の如く細密なる筆づかひをいふ。○練筆簡淨、筆づかひの熟練して簡單淨潔なること。○入手繁縟、初め練習するときには手の込みたる筆づかひを學ぶべきをいふ。

【解】　鹿柴氏曰ふ、畫を論ずるに、或は繁縟なるを善しとする人も有り、或は簡單なるを善しとする人もある。繁縟なるを善しとするのも誤つて居る。簡單なるを善しとするのも誤つて居る。或は無雜作なのが善いと謂ふ人もあり、或は容易に筆を下さないのが善いと謂ふ人も有る。容易に筆を下さないのが善いと謂ふのも誤つて居る。無雜作なのが善いと謂ふのも誤つて居る。或は法式を守ることを貴ぶ人も有り、或は法式を守らないのを貴ぶ人も有る。法式を守らないのは善くない。終身、法式に拘泥するのは更に善くない。惟だ初には法式を嚴しく守つて、そして後に法式を離れて自由自在に變化するのであり、法式を守ることの至極に至つて、法式を離れることに歸著するのである。昔、顧長康は繪具を用ふることを灑落にして、手の動くに從つて、美くしい花卉が畫き出された。韓幹は馬を畫くことの名手であつて、鬼神も來つて韓幹に馬を畫くことを請うたといふことである。顧長康は法式に拘泥しない人であり、韓幹は法式を守つて居る人である。しかして見ると、法式を守るのも宜しい、法式を守らないのも宜しいのである。惟だ初

めに禿筆を埋めて筆塚を築き、鐵硯を研りて泥の如くするほどの練習を積むことを要するのである。嘉陵の山水を畫くに、李思訓は、容易に筆を下さず、十日に一水を畫き、五日に一石を畫き、數箇月を經過して始めて畫き終つた。吳道元は、それを一日にして畫き終つた。して見ると、容易に筆を下さないのが善いと曰ふのも宜しい、無雜作なのが善いと曰ふのも宜しいのである。惟だ胸中に五岳の山水を貯へ、筆を動かすこと自在に、萬卷の書を讀み、萬里の路を旅行し、馳せて董源・巨然の屋敷の中に突進し、直に顧長康・鄭法士の奥座敷に上り込むだけの意氣精神を要するのである。倪雲林は、王右丞が山泉生動せる畫風を學んで、水淨潔に林空寂にして幽淡なる畫を書いた。郭恕先は、一疋の絹の一端に、絲車を持てる小童を畫き、他の端に紙鳶を畫き、一筆に數丈の線を引いて絲車と紙鳶とを連ねたことがある。しかし、臺閣を畫くには、牛の毛や繭の絲にも比すべき細密なる筆使ひをした。して見ると、繁縟なるも宜しい、簡單なるも惡くは無いのである。然し法式を離れようと思ふならば、必ず先づ法式を學ばねばならぬ。無雜作に畫きたいと思ふならば、必ず先づ容易に筆を下さないことを學ばねばならぬ。筆づかひが簡單淨潔になりたいと思ふならば、必ず練習する時には筆づかひの手の込んだことを學ばねばならぬ。古人が六法・六要・六長・三病・十二忌といふことを言はれたが、これは輕忽にしてはならぬのである。

六法

南齊謝赫曰。氣運生動。曰骨法用筆。曰應物寫形。曰隨類傳彩。曰經營位置。曰傳摸移寫。骨法以下五端。可學而成。氣運必在生知。

【譯】南齊の謝赫曰く、氣運生動す。曰く骨法に筆を用ふ。曰く物に應じて形を寫す。曰く類に隨つて彩を傳く。曰く位置を經營す。曰く傳摸移寫すと。骨法より以下の五端は、學びて成る可し。氣運は必ず生知に在り。

【註】謝赫、人物を寫貌するに、一覽して便ち歸り、筆を操るに、皆、遺失無し。其著に畫品錄一卷あり、畫家の優劣を品第し、陸探微より以下、凡そ二十七人、分つに六品を以てし、各〻之が評を爲す。畫家の、六法を稱すること、亦、この書に始まる。○氣運生動、畫中に天地の氣運の生動するを要すとなり。佩文齋書畫譜には、運を韻に作る。○骨法用筆、骨法は、先人の作から學得する骨力と云ふ事であり、又、自然の對象からの骨力、デッサンと云ふ事にも働く。用筆も、書的東洋獨特の傳統の用筆でもあり、又、自然から感得する用筆でもある。○應物寫形、寫生の事であるが、形を寫すと云ふは初步のうち、追々眞を寫すやうになるべきであ

る。○隨類傳彩、對象物に隨つて彩を傳してゆく事。○經營位置、構圖、その位置を經營してゆく事。○傳摸移寫、傳摸は先人の畫を摸し傳へ、移寫は先人の畫を見つゝ寫す事。孰れも學畫の一方便。○五端、五個條。○生知、生れながらにして知るなり。生れつきの意。

【解】　南齊の謝赫は、古畫品錄を著はして、畫に六法有り、六法とは、一に氣運生動すること、二に骨法に筆を用ふること、三に物に應じて形を寫すこと、四に類に隨つて彩を傳くること、五に位置を經營すること、六に傳摸移寫することであると曰つて居る。骨法より以下の五個條は、學んで出來るけれども、氣運は學んで出來ることでは無く、人々の天稟によるのである。

六要六長

宋劉道醇曰。氣運兼力。一要也。格制俱老。二要也。變異合理。三要也。彩繪有澤。四要也。去來自然。五要也。師學捨短。六要也。

【譯】　宋の劉道醇曰く、氣運、力を兼ぬる、一の要なり。格制俱に老ゆる、二の要なり。變異、理に合ふ、三の要なり。彩繪、澤有る、四の要なり。去來自然なる、五の要なり。師學に短を捨つる、六の要なり。

【註】　劉道醇、大梁の人、畫を善くし、五代名畫補遺一卷、宋朝名畫評三卷を撰す。○氣運兼力、氣力暢達の運行があつて、然も、茲で云ふのは、傳統的格調だが、その格調に力が兼ね備はつてゐるを要すと云ふ意。○格制俱老、子供つぽい繪など云ふ事の反對、人間でも、老々大々たる人を尊敬する如き意。格制は傳統の格式を指す。○變異合理、臨機應變自在のうちに、然も道理に合うてゐること。○彩繪有澤、色澤の死んだものは無論駄目、活彩でなくてはならぬ。○去來自然、流水行雲、何事も自然の去來自在なるが如くとの事。○師學捨短、兎角先生先輩などの癖、それも惡い方の癖が感染し、或はマネし易いもの、それの反對を暗示してゐる。

【解】　六要六長は、宋の劉道醇の聖朝名畫評の中から抄錄されたのであり、それには、初に『夫れ畫を識るの訣は、六要を明かにして六長を審かにするに在り。謂はゆる六要とは』とあつて、その次に此處に抄錄された文が載つて居る。されば、六要六長は、もと畫を鑒識するに就いての重要なる條件として說かれた者なるを、こゝには畫を學ぶ者の心得べき事として載せてあるのである。故に劉道醇の文の本義とは多少違つたものとして解する方が便宜であらう。そこで上の如く註したのである。讀者、劉道醇の文意を誤解したりとして怪しむ勿かれ。

麤鹵求筆。一長也。僻澁求才。二長也。細巧求力。三長也。狂怪求理。四長也。無墨求染。五長也。平畫求長。六長也。

【譯】 麤鹵なるは筆を求む、一の長なり。僻澁なるは才を求む、二の長なり。細巧なるは力を求む、三の長なり。狂怪なるは理を求む、四の長なり。墨無きは染を求む、五の長なり。平畫は長を求む、六の長なり。

【註】 麤鹵求筆、麤は粗、粗笨のまゝの畫、つまり自由畫の如きものは、今日までの習畫法でいつも云ふ、古格、古法に憑つて筆法を求めて學ぶ可し。○僻澁求才、くせのある人の畫、とよく俗に云ふが、それと、澁つていかにも遲鈍なたちの人、筆、さう云ふ人は、他を顧みてその才氣を學ぶ可し。○細巧求力、いたづらに細密精巧のみに走るたちのものは、力、力量と云ふ方面に眼を注ぐ可し。○狂怪求理、グロテスクも、怪異も面白くないものではないが、全然理に合せざるはよろしからず。○無墨求染、天性潑墨つまり墨色の出ないものは、渲染、墨を重ねてゆくがよしと云ふなり。○平畫求長、平板な畫になりたがるものは、心して深長なる意を古人の作例からも自然からも、よく自得すべきなり。

【解】 これは前の文のつゞきで、原文には、『謂はゆる六長とは』とあつて、次に此文が載せてある。これも畫を鑒識するに就いての心得べき箇條であつて、本義は、『麤鹵なる畫は、筆づかひの如何を詮索する、若し筆づかひに勝れたるところあれば、一つの長所とすべきである。僻澁なる畫は、才氣の如何を詮議する、若し才氣に勝れたるところあれば、一つの長所とすべきである。細巧なる畫は、力量の如何を詮議する、若し力量に勝れたるところあれば、一つの長所とすべきである。狂怪なる畫は、理に合ふや否やを詮議する、若し理に合はゞ、一つの長所とすべきである。墨色無き畫は、渲染の如何を詮議する、若し渲染に勝れたるところあれば、一つの長所とすべきである。平凡なる畫は、その如何なる長所あるかを詮議する、若し何等かの長所あれば、これ亦一つの長所とすべきである』といふ意であるが、しかし此處には畫を學ぶ者の心得べき箇條として抄錄されて居るのであるから、本義とは違つても上の註の如く解する方が便宜であらうと思ふ。

三　病

宋郭若虛曰。三病皆係用筆。一曰板。板則腕弱筆癡。全虧取與。狀物平褊。不能圓渾。二曰刻。刻則運筆中疑。心手相戾。向筆之際。妄生圭角。三曰結。結則欲行不行。當散不散。似物滯礙。不能流暢。

【譯】 宋の郭若虛曰く、三病は皆、用筆に係る。一に曰く板。板なれば則ち腕弱く筆癡にして、全く取與を虧き、物を狀ること平褊にして、圓渾なること能はず。二に曰く刻。刻なれば則ち運筆中ごろ疑ひ、心手相戾り、畫に向ふの際、妄に圭角を生ず。三に曰く結。結すれば則ち行かんと欲すれども行かず、當に散ずべくし

て散せず、物の滯礙するに似て、流暢なること能はず。

【註】郭若虛、郭思、宋の人、字は若虛、郭熙の子なり。著はす所、圖畫見聞志六卷有り、父熙の撰する所の林泉高致集を補ふ。こゝに載するところの語は、圖畫見聞志に出づ。○板、筆づかひの活動せず變化無きこと。○平褊　ひらたくて薄つぺらなこと。○圓渾、むつくりしたること。○刻、あくどく、とげ〳〵として情味なき意。○心手相戾、思ふやうに筆が動かぬこと。○結、のびやかなことの反對。

【解】宋の郭若虛が曰つた、畫には三つの病がある。三つの病は、皆、筆使ひに就いてである。一つは板であり、一つは刻であり、一つは結である。板なるときは、腕が弱く筆がきかず、描くべき者と描くに及ばぬ者との選擇取捨を虧き、畫きたる者が平たく薄つぺらにして、むつくりとすることが出來ない。刻なるときは、運筆が中途にして滯り、思ふやうに筆が動かず、畫を書くときに臨んで、むやみにごつ〳〵したる圭角を生ずるのである。結なるときは、進まうとしても進まれず、散ずべき場合にも散ずることが出來ず、何物かがあつて妨礙するが如く、のびやかに筆を動かすことが出來ない。

十二　忌

元饒自然曰。一忌布置拍密。二遠近不分。三山無氣脈。四水無源流。五境無彝險。六路無出入。七石只一面。八樹少四枝。九人物傴僂。十樓閣錯雜。十一瀹澹失宜。十二點染無法。

【譯】元の饒自然曰く、一には布置の拍密なるを忌む。二には遠近分たず。三には山に氣脈無し。四には水に源流無し。五には境に彝險無し。六には路に出入無し。七には石只だ一面のみ。八には樹に四枝少し。九には人物傴僂なり。十には樓閣錯雜す。十一には瀹澹、宜を失ふ。十二には點染に法無し。

【註】饒自然、畫事に精しく、畫史會要を著はす。こゝに載せたる語は畫史會要に出づ。省略甚だしき憾あり。○布置拍密、圖取りのごちや〳〵と込み入りたること。拍は畫史會要には迫に作る、從ふ可し。○源流、みなもとと下流。○彝險、易險と同じ。平坦なると險阻なると。○樹少四枝、樹木に四方に出でたる枝無きこと。○人物傴僂、人物が前かゞみになること。○樓閣錯雜、建築物がむやみに入り組みたること。○瀹澹失宜、隈取りが宜しきに叶はざること。○點染無法、點苔彩色が法式に叶はざること。

【解】元の饒自然曰ふ、畫には十二個條の忌むべきことがある。一には構圖のごちや〳〵と込み入りたることを忌む。二には遠い處も近い處も一樣にして區別の無いことを忌む。三には山々に連續せる氣脈無く離れ〳〵になりたることを忌む。四には水に

水源と下流との區別無きことを忌む。(谷川などならば、流れの上下は有るべきだが、平野の流れに強ひて上流下流を現はすのも、どうかと思はれる、此邊に所謂古法の缺點があるわけ。)五には土地に平坦なると險阻なるとの區別無きことを忌む。六には道路に見える處と見えざる處との區別無きことを忌む。(林にかくれ崖に現はれなどして斷續の趣あるを善しとする意味。)七には石が只一面あるのみにして平たく見えることを忌む。(側面正面上面などを表現せよとの心。)八には樹木に四方に出でたる枝無きことを忌む。九には人物が前かゞみになることを忌む。(つまり點景人物は高士逸人を思はしめたく、下品陰氣にならぬやう。)十には樓閣は規矩正しからざることを忌む。十一には隈取りの濃淡が宜しきに叶はざることを忌む。十二には點苔と彩色とが法式に叶はざることを忌む。

三　品

夏文彥曰。氣運生動。出於天成。人莫窺其巧者。謂之神品。筆墨超絕。傳染得宜。意趣有餘者。謂之妙品。得其形似。而不失規矩者。謂之能品。

【譯】夏文彥曰く、氣運生動して、天成に出で、人、其巧を窺ふこと莫き者、之を神品と謂ふ。筆墨超絕にして、傳染、宜しきを得、意趣、餘り有る者、之を妙品と謂ふ。其形似を得て、規矩を失はざる者、之を能品と謂ふ。

【註】夏文彥、字は士良、元の吳興の人、後、雲間に居る。圖畫に精し。圖繪寶鑑五卷を著はし、古來の能畫人の名氏を取り、軒轅より元代に迄り、旁ら外國に及び、凡そ一千五百餘人。○天成、うまれつき。○筆墨超絕、筆は古法に合ふも合はぬもなく、又、自然の對象を肉眼的の線に描き得たるも得ぬもなく、全くの其人の主觀天禀にまかせ、混然たる墨そのものゝうちに自然も己れも溶け込んでゐるやうなものは、超絕の語にはまるのであらう。○傳染、いろどりのこと。○形似、形のよく似たること。

【解】夏文彥曰ふ、氣運生動して、天禀に出で、その巧妙なること、他人の學び得る所に非ざる者を、神品と謂ふ。筆勢墨色卓越して、いろどりの法、宜しきに叶ひ、餘韻少からざる者を、妙品と謂ふ。畫く所能く其物に似て、法式に違はざる者を能品と謂ふ。(此の三階級の區別は、東西を問はず、諸藝何にでも善くあてはまるであらう。)

鹿柴氏曰。此述成論也。唐朱景眞。於三品之上。更增逸品。黃休復迺先逸而後神妙。其意則祖於張彥遠。彥遠之言曰。失於自然而後神。失於神而後妙。失於妙而成謹細。其論固奇矣。但畫至於神。能事已畢。豈有不自然者哉。逸則自應

置三品之外。豈可與妙能議優劣。若失於謹細。則成無非無刺媚世容悅。而爲畫中之鄉愿與媵妾。吾無取焉。

【譯】 鹿柴氏曰く、此れ成論を述ぶるなり。唐の朱景眞は、三品の上に於て、更に逸品を增す。黃休復は迺ち逸を先にして神妙を後にす。其意は則ち張彥遠を祖とす。彥遠の言に曰く、自然を失して而して後に神なり。神を失して而して後に妙なり。妙を失して而して後に謹細を成すと。其論は固より奇なり。但し畫は神に至りて、能事已に畢る。豈に自然ならざる者有らんや。逸は則ち自ら三品の外に置く可し。豈に妙能と優劣を議すの鄉愿と媵妾と爲る。吾、取る無し。

【註】 成論、古人の定論をいふ。○朱景眞、唐の吳郡の人、眞は一に玄に作る。唐朝名畫錄一卷を撰す。錄する所の畫家を、神妙能逸の四品に分ち、神妙能品は各〻三等に分ち、逸品は等を分たず。畫家の、逸品と稱すること、景眞より始まる。○三品之上、三品の外の意。三品よりも上の位の意に非ず。○黃休復、宋の景德中の人、字は歸本、益州名畫錄（一名、成都名畫記）三卷を撰す。錄する所、皆、蜀中の畫手、唐の乾元より、宋の建德に至るまで、凡そ五十八人。逸神妙能の四品に分つこと、朱景眞と同じけれども、其の逸品を神品の前に移すことは、又少しく異なり。蓋し景眞は逸品を以て三品の外に置き、休復は逸品を以て三品の上に置くなり。○張彥遠、唐の河東の人、博學にして繪事に精しく、歷代名畫記十卷を撰す。前の三卷は皆畫論、四卷以下は、皆、畫家の小傳、逸文、軼事にして、引據浩博、以て考證に資す可きこと多し。但だ丹青を評品するのみにあらず。○謹細、綿密なること。○容悅、人の意におもねりて人に容れられ悅ばるゝことを求むるをいふ。孟子盡心上篇に、この君に事ふれば則ち容悅を爲す者なり、とあるに本づく。今の力作などと稱するもの、多くは此の謹細容悅であらう。○鄉愿、鄉里の謂はゆる愿人の意にして、其鄉里に於て謹み深くして、君子らしく見ゆる僞善者なり。論語陽貨篇に、鄉愿は德の賊なり、とあり。○媵妾、よめいりする女子につきそうて行く女。

【解】 鹿柴氏曰ふ、夏文彥の此說は、古人の論を述べたのである。唐の朱景眞は、神品・妙品・能品の外に逸品を增して、四品として居る。宋の黃休復は、四品に分つことは朱景眞と同じいけれども、逸品を第一として、神品・妙品等を次にして居る。これは唐の張彥遠の意を祖述したのである。彥遠は、『自然なる者が最も勝れたる者であり、自然を失つて而る後に神品となる。神品を失つて而る後に妙品となる。妙品を失つて而る後に謹細なる畫となる。』と曰つて居る。この論は固よりおもしろい論である。然し畫は神品に至れば、此上に爲す可き事は無いのであり、自然に叶はぬ者が有るべき筈はない。逸品は自ら三品の外に置くべき者であり、妙品能品と優劣を議す可き者

では無い。謹細に過ぎたる者は、務めて人に非議されぬやうにと心懸け、世に媚び人に容れられ悅ばれることを求める者と爲り、畫の中の僞君子であり、婢妾である。吾が取らざる所である。

分宗

禪家有南北二宗。於唐始分。畫家亦有南北二宗。亦於唐始分。其人實非南北也。北宗則李思訓父子。傳而爲宋之趙幹。趙伯駒。伯驌。以至馬遠。夏彥之。南宋則王摩詰。始用渲澹。一變鉤斫之法。其傳爲張璪。荆浩。關仝。郭忠恕。董源。巨然。米氏父子。以至元之四大家。亦如六祖之後馬駒雲門也。

【譯】禪家に南北の二宗有り、唐に於て始めて分る。畫家にも亦南北の二宗有り、亦、唐に於て始めて分る。其人は實は南北に非ざるなり。北宗は則ち李思訓父子、傳へて宋の趙幹・趙伯駒・伯驌と爲り、以て馬遠・夏彥之に至る。南宗は則ち王摩詰、始めて渲澹を用ひて、鉤斫の法を一變す。其傳は張璪・荆浩・關仝・郭忠恕・董源・巨然・米氏父子と爲り、以て元の四大家に至る。亦、六祖の後の馬駒・雲門の如きなり。

【註】分宗、畫が南北の二宗に分れたることを說く。○禪家有南北二宗、禪宗の第五祖弘忍大師の弟子に、神秀禪師と第六祖慧能禪師とあり。神秀は姓は李、北宗と爲す。慧能は姓は盧、南宗と爲す。謂はゆる南能北秀、南頓北漸なり。○其人實非南北也、禪宗の南宗と北宗とは、慧能は南方の人にして南宗と爲し、神秀は北方の人にして北宗と爲し、人に南北あれども、畫の南宗と北宗とは之に異なり、南宗必ずしも南方の人に非ず、北宗必ずしも北方の人に非ず、人に南北あるに非ず、との意。○趙幹、江寧の人、善く山水林木を畫き、尤も布景に長ず。○趙伯駒、字は千里、山水花果翎毛に優なり。○伯驌、字は希遠、伯駒の弟、著色尤も工なり。○馬遠、宋の錢塘の人、善く山水人物花鳥を畫く。光宗の時、待詔を授けらる。畫院獨步と爲す。○夏彥之、恐らくは夏珪に作るべからんか。夏珪は、宋の錢塘の人、字は禹玉、善く山水を畫く。李唐以下、其右に出づる者無し。○渲澹、淡墨にて染め重ねて行く。○鉤斫、輪廓の線描。○張璪、字は文通、唐の吳郡の人、官、檢校祠部員外郎・鹽鐵判官たり、事に坐して衡忠二州の司馬に貶せらる。畫を善くし、樹石山水、高低秀絕、咫尺深重なり。畢宏、一見して之を驚異し、受くる所を問ふ。曰く、外は造化を師とし、內は心源を得と。繪境一篇を著はし、畫の要訣を言ふ。○荆浩、五代の畫家、泌水の人、字は浩然、亂を避けて太行山の浩谷に隱れ、自ら浩谷子と號し、山水樹石を畫きて以て自ら娛む。○關仝、五代の時の長安の人、善く山水を畫き、好んで秋山寒林の圖を作る。畫法多く荆浩を師とし、浩と名を齊しくす。○米氏父子、米芾と米友仁。米芾は、宋の襄陽の人、字は元章、鹿門居士と號し、又、海嶽外史と稱す。特に翰墨に妙に、王獻之の筆意を得たり。山水人物を畫き、自ら一家を成す。禮部員外郎、知淮陽軍たり。世、亦、米南宮と稱す。所謂米點は此の人の創意。米友仁は芾の子、字は元暉、書畫を善くし、世、小米と號す。仕へて兵部侍郎、敷文閣直學士に至る。○元之四大家、後に出づ。○馬駒雲門、馬祖大師と雲門大師となり。馬祖は、六祖慧能大師の第三世の

法孫にして、禪門一代の英傑なり。雲門大師は、六祖の第八世の法孫にして、諱は文偃、雲門宗の開祖たり。

【解】 禪宗に南宗と北宗との二宗が有るが、それは唐の時に始めて分れたのである。畫家の南宗・北宗といふのは、其人に南方の人と北方の人との區別が有るのでは無い。北宗は、李思訓父子が開祖であり、傳へて宋の趙幹・趙伯駒・伯驌となり、馬遠・夏彥之に至つたのである。南宗は王摩詰が開祖であり、始めて渲澹を用ひて、鉤斫の法を一變した。それから相傳へて張璪・荆浩・關仝・郭忠恕・董源・巨然・米氏父子に至り、元の四大家に至つたのである。これも六祖大師の後に馬祖大師・雲門大師などの英傑が出たのと似て居るのである。

重品

自古以文章名世。不必以畫傳。而深於繪事者。代不乏人。玆不能具載。然不惟其畫。惟其人。因其人想見其畫。令人亹亹起仰止之思者。漢則張衡。蔡邕。魏則楊修。蜀則諸葛亮。亮有南彝圖以化俗。晉則嵇康。王羲之。王廙。書畫皆爲逸少師。王獻之。溫嶠。宋則遠公有江淮名山圖。南齊則謝惠連。梁則陶弘景。弘景以鞟放二牛圖謝梁武徵聘。唐則盧鴻。有草堂圖。宋則司馬光。朱熹。蘇軾而已。

【譯】 古より文章を以て世に名あり、必ずしも畫を以て傳はらずして、而も繪事に深き者、代〻人に乏しからず。玆に具に載すること能はず。然れども惟だ其畫のみ惟だ其人のみならず、其人に因りて其畫を想ひ見れば、人をして亹亹として仰止の思を起さしむる者は、漢には則ち張衡・蔡邕、魏には則ち楊修、蜀には則ち諸葛亮、晉には則ち嵇康・王羲之・王廙・書畫、皆、逸少の師たり。王獻之・溫嶠、宋には則ち遠公、江淮名山の圖有り。南齊には則ち謝惠連、梁には則ち陶弘景、唐には則ち盧鴻、草堂の圖有り。宋には則ち司馬光・朱熹・蘇軾のみ。

【註】 重品、人品の重んずべきことを說く。○亹亹、うまずに勤勉する貌。詩大雅文王篇に、亹亹たる文王、令聞已まず、とあるに本づく。○張衡、後漢の西鄂の人、字は平子、善く文を屬り、兩京賦を作り、構思十年にして乃ち成る。尤も天文曆算に精しく、渾天儀を作り、又、畫を善くす。○蔡邕、後漢の陳留の人、字は伯喈。靈帝の時、郎中に拜せられ、楊賜等と與に、奏して六經の文字を定め、碑を太學の門外に立つ。著はす所の詩賦碑銘書記等、凡そ百四種あり。書畫を善くし、名を一代に擅にす。○楊修、三國の魏の華陰の人、字は德祖。太祖の爲めに扇に畫き、誤つて點したるを蠅と成す。○諸葛亮、字は孔明、躬ら隴畝に耕し、南陽に家す。後起つて蜀の先主に事へ、丞相と爲る。嘗て南彝の圖を畫きて以て民俗を敎化す。○嵇康、三國の魏の譙郡の人、字は叔夜、丰姿俊

逸にして、醒めたるときは孤松の獨立するが如く、醉へるときは玉山の將に頹れんとするが若し。氣を導き性を養ひ、養生篇を著はす。中散大夫に拜せらるれども就かず。常に琴を彈じて以て自ら樂しむ。景元中、司馬昭に害せらる。獅子擊象圖・巢由圖を畫く。○王羲之、晉の人、字は逸少、王導の從子、右軍將軍・會稽內史と爲る。世に王右軍と稱す。池に臨んで書を學び、池水盡く黑し。草隸、古今の冠たり。論者稱す、其筆勢、飄として游雲の若く、矯として驚蛇の若しと。丹青も亦妙なり。○王廙、字は世將、晉室、江を過ぎて後、書畫第一と爲す。○王獻之、字は子敬、羲之の子、少きとき盛名有り、高邁不羈なり。草隸に工にして、父と並びて二王と稱せらる。仕へて中書令に至る。又、畫を善くす。○溫嶠、晉の太原祁の人、字は太眞、初め劉琨の右司馬と爲り、表を江東に奉ず。元帝、之を器とす。王導等、竝に與に親善なり。後、散騎常侍に除せらる。蘇峻反するとき、嶠、陶侃と共に討ちて之を平ぐ。官、驃騎大將軍・始安郡公に至る。忠武と謚す。嶠が畫に工なること、孫暢の畫記に見ゆ。○遠公、僧慧遠、白蓮社を結びて、淨土に歸依するを以て宗と爲し、廬山の東林寺に居る。詩に工に、又、畫を能くし、江淮の名山の圖を畫く。陶淵明と共に虎溪三笑の圖題中の人。○謝惠連、南北朝の宋の陽夏の人、幼にして聰敏、年十歲にして、能く文を屬る。族兄謝靈運、深く知賞を加へ、嘗て云ふ、篇章有る毎に、惠連に對すれば、輒ち佳語を得と。嘗て永嘉の西堂に於て詩を思ひ、終日成らず、忽ち夢に惠連を見、卽ち池塘生二春草一を得、大に以て工と爲す。惠連、又、雪賦を爲る。靈運、其文を見て曰く、張華重ねて生るとも、易ふること能はずと。惠連、書畫並に妙なり。○陶弘景、南北朝の時の秣陵の人、字は通明。齊の高帝の時、嘗て諸王の侍讀と爲る。後、句容の句曲山に隱れ、自ら華陽隱居と號す。

晩年、華陽眞逸と號し、又、華陽眞人と曰ふ。神仙を好み、辟穀導引の術を善くす。梁の武帝、屢〻禮聘を加ふ。弘景、羈牛と放牛との圖を畫きて、之を謝す。圖像集要を著はすといふ。年八十五にして、病無くして卒す。貞白先生と謚す。○盧鴻、唐の洛陽の人、字は顥然、嘗て自ら其居を圖す。世に之を傳ふ。當時、山林の勝絕と號す。○司馬光、宋の陝水夏縣涑水鄕の人、字は君實、仁宗・英宗に歷仕す。神宗の時、王安石の新法の害を議するを以て、出でゝ洛に居る。高太后、朝に臨み、光入りて相と爲り、盡く新法を改む。相位に在ること八月にして卒す。太師溫國公を贈り、文正と謚せらる。資治通鑑を著はし、治亂興亡の迹を詳かにす。支那編年史の最も善き者と爲す。世の人、亦、涑水先生と稱す。山水を畫き、酷だ李思訓に倣ふ。○朱熹、宋の婺源の人、字は元晦、後、仲晦と改む。宋の理學を大成せる大學者なり。慶元六年卒す。年七十一歲。文公と謚す。嘗て親しく己の像を傳へて、徽州に刻す。深く吳道子の筆意を得たりと云ふ。○蘇軾、宋の眉山の人、字は子瞻、神宗の時、王安石と議論合はず、黃州に貶せられ、室を東坡に築き、東坡居士と號す。哲宗の時、召し還され、翰林學士・兵部尙書に累官す。卒して文忠と謚す。文章に工に、縱橫奔放にして、百世に雄視す。詩、飄逸にして羣ならず。書畫も亦名有り。

【解】 昔から、文章を以て世に有名であり、畫を以て知られて居ないけれども、繪畫の事に深く造詣したる人は、代々乏しくないのであつて、ここに悉く載せることは出來ない。唯だ畫を見るのみでなく、唯だ其人柄を想ふのみでなく、其人柄に因つて其畫を想ひ遣つて、人をして欽敬仰慕の念を盛に起さしめる者は、漢には張衡・蔡邕あ

り、魏には楊修あり、蜀には諸葛亮有り、晉には嵇康・王羲之・王廙・王獻之・溫嶠あり、宋には遠公あり、南齊には謝惠連あり、梁には陶弘景あり、唐には盧鴻あり、宋には司馬公・朱熹・蘇軾あるのみである。

成家

自唐宋荆關董巨。以異代齊名。成四大家。後而至李唐。劉松年。馬遠。夏珪。爲南渡四大家。趙孟頫。吳鎭。黃公望。王蒙。爲元四大家。高彥敬。倪元鎭。方方壺。雖屬逸品。亦卓然成家。所謂諸大家者。不必分門立戶。而門戶自在。如李唐則遠法思訓。公望則近守董源。彥敬則一洗宋體。元鎭則首冠元人。各自千秋赤幟難拔。不知諸家肖子。近日屬誰。

【譯】唐宋の荆關董巨が異代を以て名を齊しくして四大家を成しゝより、後にして李唐・劉松年・馬遠・夏珪に至りて、南渡の四大家と爲す。趙孟頫・吳鎭・黃公望・王蒙を元の四大家と爲す。高彥敬・倪元鎭・方方壺は、逸品に屬すと雖も、亦卓然として家を成す。謂はゆる諸大家は、必ずしも門を分ち戶を立てずして、而も門戶自ら在り。李唐は則ち遠く思訓に法り、公望は則ち近く董源を守り、彥敬は則ち宋體を一洗し、元鎭は則ち元人に首冠たるが如きは、各自千秋の赤幟、拔き難し。知らず諸家の肖子は、近日、誰にか屬する。

【註】成家、一家を成すなり。一流を起すこと。○李唐、宋の人、字は晞古、善く山水人物を畫き、尤も畫牛に工なり。高宗嘗て其卷上に題して曰く、李唐は唐の李思訓に比す可しと。○劉松年、宋の錢塘の人、張敦禮を師とし、山水樓臺人物、神氣精妙にして、時に絕品と稱す。○南渡、宋の汴京、金に滅ぼされ、高宗、南して江を渡りて臨安に都す。之を南渡と謂ふ。卽ち南宋なり。○趙孟頫、字は子昂、松雪道人と號す。湖州の人。本、宋の宗室にして元に降る。官、翰林學士承旨たり、故に又、趙承旨と稱す。書畫並に工に、詩文も亦清邃なり。著はす所、松雪齋集十卷あり。○吳鎭、元の嘉興の人、字は仲圭、梅花道人と號す。善く山水花竹を畫く。人と爲り孤潔にして、投ずるに佳き紙筆を以てすれば、輒ち欣然として几に就く。若し臨むに權勢を以てすれば、則ち應せず。○黃公望、元の常熟の人、本姓は陸、永嘉の黃氏を嗣ぐ。字は子久、一峯と號し、又、大癡道人と號す。富春に隱る。善く山水を畫く。董源・巨然を師とし、晚年自ら一家を成す。其畫法、二種有り。一は淺絳色にして、山多くは麻頭、筆勢雄偉なり。一は水墨色にして、皴紋極めて少く、筆意簡達なり。畫中の逸品と爲す。王蒙・倪瓚・吳鎭と與に、元末の四大家と爲す說もあり。○王蒙、元の吳興の人、字は叔明、黃鶴山樵と號す。趙子昂の外孫なり。蒙、外氏の法を得て、善く山水を畫く。又、泛く唐宋の名家に涉り、董源・王淮を以て師と爲す。故に縱逸多姿、墨法秀潤なり。明の洪武の時、事を以て獄に下されて死す。○高彥敬、高克恭、字は彥敬、房山と號す。元の人なり。仕へて大中大夫・刑部尙書に至る。墨竹は文同に減せず。山水は初め二米を學び、後、李成・董巨の法を用ひ、造詣精絕なり。○方方壺、方從義は、元の人、字は無隅、方壺と號す。貴溪の道士なり。性、畫を好む。人、禮を以て之を求むれば、始めて爲めに其

一二を出す。皆、蕭散にして、世人の能く及ぶ所に非ず。○赤幟、史記淮陰侯列傳に、趙の幟を抜きて赤幟を立つ、とあるに本づく。赤幟難抜とは、其業績は人の能く動かす所に非ざるをいふ。○肖子、不肖子に對する語にして、父に似たる子なり。祖先を辱めざる後繼者の意。

【解】 唐末の荆浩・關仝・宋の董源・巨然の四人は、時代は異なつて居るけれども、同等の名聲があつたので、合はせて四大家と稱せられた。それより後 李唐・劉松年・馬遠・夏珪は、宋の南渡の後の四大家と稱せられて居る。趙孟頫・吳鎮・黃公望・王蒙は、元の四大家と稱せられて居る。高彥敬・倪元鎭・方方壺は、逸品の部に屬する者であるが、これ等の人も亦、卓然として傑出して各〳〵一家を成して居る。是等の諸大家は、必ずしも門を分ち戸を立てて一流を起さうとしたのではないけれども、一流が自然に出來て居る。李唐は遠く唐の李思訓に法り、公望は近く宋の董源の畫風を學び、彥敬は宋の風格をきれいさつぱりと洗ひ落し、元鎭は元の畫人中の第一位たるが如きの類は、各〳〵自ら千古不磨の業績を立てたるもので、何人も追隨し難いものである。諸家の祖先を辱めざる後繼者は、今日、何人であるか。

能變

人物自顧陸展鄭。以至僧繇道元。一變也。山水則大小李。一變也。荆關董巨。又一變也。李成。范寬一變也。劉李馬夏。又一變也。大癡黃鶴。又一變也。

鹿柴氏曰。趙子昂居元代。而猶守宋規。沈啓南本明人。而儼然元畫。唐王洽若預知有米氏父子。而潑墨之關鑰先開。王摩詰若逆料有王蒙。而渲澹之衣鉢早具。或創於前。或守於後。或前人恐後人之不善變。而先自變焉。或後人更恐後人之不能善守前人。而堅自守焉。然變者有膽。不變者亦有識。

【譯】 人物は顧陸展鄭より、以て僧繇道元に至る、一變なり。山水は則ち大小李、一變なり。荆關董巨、又一變なり。李成・范寬、一變なり。劉李馬夏、又一變なり。大癡・黃鶴、又一變なり。

鹿柴氏曰く、趙子昂は、元代に居りて、而も猶ほ宋規を守り、沈啓南は、本、明人にして、而も儼然たる元畫なり。唐の王洽は、預め米氏父子有るを知りて潑墨の關鑰先づ開けるが若し。王摩詰は、逆め王蒙有るを知りて渲澹の衣鉢早く具せるが若し。或は前に創め、或は後に守り、或は前人、後人の善く變せざらんことを恐れて先づ自ら變じ、或は後人、更に後人の善く前人を守ること能はざらんことを恐れて堅く自ら守る。然れども變ずる者は膽有り、變せざる者も亦識有り。

【註】 能變、時勢と共に畫風も能く變化するものなること。○顧陸展鄭、顧愷之、陸探微、展子虔、鄭士法なり。陸探微は、劉宋の人、畫に六法有り、古より、能く之を具足するもの鮮し。陸に至りて、法を得ること備

はれりと爲す。展子虔は、隋の人、人物を畫き、神彩、生けるが如く、意度具足す。唐畫の祖と爲す可し。○僧繇、張僧繇は、南北朝の梁の畫家、吳の人、官、右軍將軍・吳興太守に至る。善く山水佛像を畫く。又、嘗て四龍を畫きて、睛を點せず。人固く請うて之を點せしむ。二龍、壁を破りて飛び去る。未だ點せざる者は、故の如し。○道元、吳道子なり。○大小李、李思訓と李昭道。○荆關董巨、荆浩、關仝、董源、巨然。○李成、宋の吳の人、字は咸熙、五代の末、詩酒を以て公卿の間に遨遊す。善く山水を畫く。山林澤藪、平遠險易、眞に逼らざる無し。○范寬、宋の華原の人、名は中正、字は仲立。性緩にして、世人、之を稱して范寬と曰ふ。風儀峭古、酒を嗜む。善く山水を畫く。初め李成を師とし、後、荆浩を師とし、落筆老勁なり。○劉李馬夏、劉松年、李唐、馬遠、夏珪。○大癡、黃子久。○黃鶴、王叔明。○沈啓南、沈周は明の長洲の人、字は石田、啓南と號す。博く群書を覽、文は左氏を學び、詩は白蘇を學び、字は黃庭堅を學び、尤も畫に工なり。唐寅・文徵明・仇英と、並び稱して明の四家と爲す。○王洽、唐の人、善く潑墨して山水を畫く。故に時人、之を王墨と謂ふ。多く江湖に遊び、常に山水松石雜樹を畫く。○潑墨、墨色を驅使すること。○關鑰、くわんぬきと、じやうまへ。○衣鉢、祕要を傳授するを謂ふ。本、禪宗の語なり。

【解】 人物畫は、顧愷之・陸探微・展子虔・鄭士法より、張僧繇・吳道元に至つて、一變した。山水畫は、李思訓父子に至つて一變した。荆浩・關仝・董源・巨然に至つて、又一變した。李成・范寬に至つて、又一變した。劉松年・李唐・馬遠・夏珪に至つて、又一變した。大癡道人・黃鶴山樵に至つて、又一變した。

鹿柴氏曰ふ、趙子昂は、元の時代に居りながら、猶ほ宋代の法式を守つてゐた。沈啓南は、本、明代の人であるのに、其の畫く所は、儼然たる元代の畫である。唐の王洽が潑墨の法を始めたのは、後世に米元章父子有ることを豫め知つてゐた如くである。王摩詰が渲澹の法を始めたのは、後世に王蒙有ることを預め計つてゐた如くである。或は前代に於て一流を創めた人もある。或は後代に於て前代の法式を守つてゐた人もある。或は前代の人であつて、後代の人がうまく變化しないことを恐れて、先づ自ら變化した人もある。或は後代の人であつて、更に後代の人が善く前代の人の法式を守ること能はざらんことを恐れて、堅く自ら法式を守つて居た人もある。然し自ら法式を變化する人は、膽略があり、法式を堅く守つて變化しない人も、亦、識見がある。

計　皴

學者必須潛心畢智。先攻某一家皴。至所學既成。心手相應。然後可以雜採旁收。自出鑪冶。陶鑄諸家。自成一家。後則貴於渾忘。而先實貴於不雜。約略計之。

披麻皴　亂麻皴　芝麻皴　大斧劈　小斧劈　雲頭皴　雨點皴
彈渦皴　荷葉皴　攀頭皴　骷髏皴　鬼皮皴　解索皴　亂柴皴
牛毛皴　馬牙皴

更有披麻而雜雨點。荷葉而攪斧劈者。至某皴創自某人。某人師法於某。余已具載於山水分圖之上。茲不贅。

【譯】學者は必ず須く心を潛め智を畢し、先づ某の一家の皴を攻むべし。學ぶ所既に成り、心手相應ずるに至つて、然る後に、以て雜採旁收し、自ら鑪冶を出し、諸家を陶鑄し、自ら一家を成す可し。後には則ち渾て忘るゝを貴ぶ。而れども先には實に雜ならざるを貴ぶ。約略して之を計ふれば、

披麻皴　亂麻皴　芝麻皴　大斧劈　小斧劈　雲頭皴　雨點皴　彈渦皴　荷葉皴　攀頭皴　骷髏皴　鬼皮皴
解索皴　亂柴皴　牛毛皴　馬牙皴

更に、披麻にして雨點を雜へ、荷葉にして斧劈を攪ふる者有り。某皴は某人より創まり、某人は某を師とし法るに至つては、余已に具に山水分圖の上に載す。茲に贅せず。

【註】計皴、皴の種類を列擧すること。○心手相應、心と筆とが一致すること。莊子に、之を手に得て而して心に應ず、とあり。○雜採旁收、ひろく他の諸家の法を採用すること。○自出鑪冶、自身に工夫を運らす。○陶鑄諸家、諸家の法をこねまぜること。○雜雨點の雨、底本に他に作るは誤なり。

【解】山水畫を學ぶ者は、必ず、心を潛め智力を盡して、先づ何人かの一家の皴を學習すべきである。學習する所が既に成就して、心と筆とがぴつたりと一致するやうになつて、然る後に、博く諸家の法式を採用し、自身に工夫を運らし、諸家の法式をこねまぜて、自ら一流を成す可きである。後には學習したる法式をすべて忘れてしまふことを貴ぶのである。然し初めには專ら一家の法式を練習して他の諸家の法式を混淆しないことを貴ぶのである。大略、皴の種類を列擧すれば、前記の如くである。又、披麻皴であつて雨點皴を雜へた者も有る。荷葉皴であつて斧劈を雜へた者も有る。何の皴は何某より始まり、何某は何某を師とし法つたといふが如きの類は、余は已に山石分圖の上に詳細に載せてゐるので、こゝには述べない。（十六の皴法は餘り型式的だが、古來の名匠の苦心から要約されたもので、等閑には視られないが、やゝもすれば是を墨守した爲に、明清南畫の墮落を來した。殊に日本の山水を畫にする場合、此の十六皴では割り切れなからう。）

釋名

淡墨重疊。旋旋而取之曰幹。淡以銳筆橫臥惹而取之曰皴。再以水墨三四而淋之曰渲。以水墨袞同澤之曰刷。以筆直往而指之曰捽。以筆頭特下而指之

曰擢。擢以筆端而注之曰點。點施於人物。亦施於苔樹。界引筆去。謂之曰畫。畫施於樓閣。亦施於松針。就縑素本色。縈拂以淡水而成烟光。全無筆墨蹤跡曰染。露筆墨蹤跡而成雲縫水痕曰漬。瀑布用縑素本色。但以焦墨暈其旁曰分。山凹樹隙。微以淡墨瀹落成氣。上下相接曰襯。

說文曰。畫畛也。象田畛畔也。釋名曰。畫掛也。以彩色掛象物也。尖曰峰。平曰頂。圓曰巒。相連曰嶺。有穴曰岫。峻壁曰崖。崖間崖下曰巖。路與山通曰谷。不通曰峪。峪中有水曰溪。山夾水曰澗。山下有潭曰瀨。山間平坦曰坂。水中怒石曰磯。海外奇山曰島。山水之名。約略如此。

【譯】淡墨重疊し、旋旋にして之を取るを斡と曰ふ。淡く鋭筆を以て横臥して惹きて之を取るを皴と曰ふ。再び水墨を以て三四たびして之を淋ぐを渲と曰ふ。水墨を以て袞同して之を澤するを刷と曰ふ。筆を以て直往して之を指すを捽と曰ふ。筆頭を以て特下して之を指すを擢と曰ふ。擢するに筆端を以てして之を注ぐを點と曰ふ。點は人物に施し、亦、苔樹に施す。筆を界引し去る、之を謂つて畫と曰ふ。畫は樓閣に施し、亦、松針に施す。縑素の本色に就きて縈拂するに淡水を以てして烟光を成し、全く筆墨の蹤跡無きを染と曰ふ。筆墨の蹤跡を露はして雲縫水痕を成すを漬と曰ふ。瀑布は縑素の本色を用ひ、但だ焦墨を以て其旁を暈するを分と曰ふ山凹樹隙、微しく淡墨を以て瀹落して氣を成し、上下相接するを、襯と曰ふ。

說文に曰く、畫は畛なり、田の畛畔に象るなりと。釋名に曰く、畫は掛なり、彩色を以て物を掛象するなりと。尖れるを峰と曰ふ。平かなるを頂と曰ふ。圓きを巒と曰ふ。相連なるを嶺と曰ふ。穴有るを岫と曰ふ。峻壁を崖と曰ふ。崖間崖下を巖と曰ふ。路と山と通ずるを谷と曰ふ。通せざるを峪と曰ふ。峪中に水有るを溪と曰ふ。山、水を夾むを澗と曰ふ。山下に潭有るを瀨と曰ふ。山間の平坦なるを坡と曰ふ。水中の怒石を磯と曰ふ。海外の奇山を島と曰ふ。山水の名、約略、此の如し。

【註】釋名、筆づかひの名と山水の名とを釋するなり。○鋭筆、とがりたる筆。○袞同、べたぬりすること。○特下、一つ一つ別に筆を下すこと。○指之、筆を下すこと。○界引、或は縱或は横に線を引くこと。○松針、松の葉。○縑素本色、畫絹の地色。○縈拂、ふちをぬること。○烟光、烟や霞のさま。○雲縫、雲のきは。○水痕、水のきは。○焦墨、濃きかすれ墨。○暈、ぼかすこと。○山凹、山のくぼみ。○樹隙、樹木のすきま。○瀹落、ぼかすこと。○說文、書名、漢の許愼が撰せる字書なり。○釋名、書名、漢の劉熙が撰せる字書の類。○怒石、出ばりたる石。○海外、海の中の意。

【解】斡とは、淡墨をだん〳〵に重ね、ぐる〳〵とまはして書き取ることである。皴とは、筆を横にしてこすれば、それは自然に皴になる。皴は山や石や大木の木肌などのしはになる。渲とは、皴だけでは乾燥したかさ〳〵した者であるが、更に淡墨を以て其上へ淋いでゆくことである。渲染法と云つて、單に隈どりて染めず、

皴の如く刷の如くして渲めることである。刷とは、文字の上では、渲と刷と二種に分けてあるが、實技の上では同一の事と云ふより外に說明のしかたが無い。その方法を以てすれば、自ら潤澤を得るのである。捽とは、直に引いて筆を下すことである。今、皴と渲と刷との三手法だけで、山なり石なりを描いたとすれば、ひきしまりはまだ出來てゐないのである。そこで、これまでは皴や渲や刷と云ふやうに筆を横にしてゐたのを、今度は直筆にして、その渲や刷の濃淡によつて、これから濃でひきしめるか、中位の墨でひきしめるか、兎に角ひきしめをするのである。擢とは、筆さきを以て一つ一つ別に筆を下すことである。專門畫家は、俗に活筆とか活墨とか云つてゐるが、山なり石なりの明暗凹凸の大切な個所へ、指す如くに一筆二筆を加へる。擢んでると云ふ言葉では、今の人にぴつたりせぬかも知れぬが、兎に角、その要所へ加筆加墨することであつて、實技上では、そんな事を言はなくても、その物足らぬ處へ自ら加筆して行くやうになるのである。點とは、筆の先を以て點を打つことである。點は點苔と云つて、石ならば苔にも擬して古びをつけたり、或は遠山の杉木立その他雜木などを點出したりするのでもあり、慣用手段としては、山や石などのひきしめにも脉絡にも用ひて居る。畫とは、或は縱或は横に筆を引くことである。線を畫く一種の運筆の名である。畫は樓閣を畫くときに用ひ、松の葉を描くときに用ひる。染とは、繪絹の白いまの處へたゞの水を引いておき、その濡れて居る處へ、或は上下、或は左右へ淡墨にてぼかしを施し、その白いまゝの處が烟光であつて、ぼかしてそれを出し、筆墨の跡の全く無い方法を染といふのである。漬とは、筆墨の跡をあらはして、雲のきはや水のきはを出す方法をいふのである。分とは、繪絹の地の色を以て瀑をあらはし、濃墨を以て其兩側をぼかす方法をいふのである。瀑を描く場合に、その兩側を墨の濃いもの又は淡いものを以て、水の落ちてゐる意の個所と、岩なり斷崖なりの個所とを分つ手段である。襯とは、山の凹みや樹木の隙間やに、微かに淡墨を以てぼかして氣を畫き、上下左右相連接するやうにする手段である。

說文に、畫は畛である、田の畛畔に象つたのである。田のあぜの界を區切りするに象つたのである。と曰つてある。釋名に、畫は掛である。彩色を以て物の形狀を掛け象つたのである。と曰つてある。尖りたる山を峰と曰ふ。平かなる山を頂と曰ふ。圓き山を巒と曰ふ。山の相連なりたるを嶺と曰ふ。山に穴あるを岫と曰ふ。嶮峻なる切り

きしを崕と曰ふ。崕の間、崕の下を巖と曰ふ。路ありて山に通じたるを谷と曰ふ。路の山に通ずるもの無きを峪と曰ふ。峪の中に流れたる水を溪と曰ふ。山に夾まれたる水を澗と曰ふ。山の下にある潭を瀨と曰ふ。山の間の平坦なる處を坡と曰ふ。水の中に出ばりたる石を磯と曰ふ。海の中に在る奇異なる山を島と曰ふ。山水の名稱は、大略、此の如くである。

用筆

古人云。有筆有墨。筆墨二字。人多不曉。畫豈無筆墨哉。但有輪廓。而無皴法。即謂之無筆。有皴法。而無輕重。向背。雲影。明晦。即謂之無墨。王思善曰。使筆不可反爲筆使。故曰石分三面。此語是筆。亦是墨。

凡畫有用畫筆之大小蟹爪者。點花染筆者。畫蘭與竹筆者。有用寫字之兎毫湖穎者。羊毫雪鵞柳條者。有慣倚毫尖者。有專取禿筆者。視其性習各有相近。未可執一。

鹿柴氏曰。雲林之倣關仝。不用正鋒。乃更秀潤。關仝實正鋒也。李伯時書法極精。山谷謂其畫之關鈕。透入書中。則書亦透畫中矣。錢叔寶遊文太史之門。日見其搦管作書。而其畫筆益妙。夏景與陳嗣初王孟端相友善。每於臨文見草。而竹法愈超。與文士薰陶。實資筆力不少。又歐陽文忠公。用尖筆乾墨。作方濶字。神采秀發。觀之如見其清眸豐頰。進趨曄如。徐文長醉後拈寫字敗筆。作拭桐美人。即以筆染兩頰。而丰姿絕代。轉覺世間鉛粉爲垢。此無他。蓋其筆妙也。用筆至此。可謂珠撒掌中。神遊化外。書與畫均無岐致。不寧惟是。南朝詞人直謂文爲筆。沈約傳曰。謝元暉善爲詩。任彥章工於筆。庾肩吾曰。詩既若此。筆又如之。杜牧之曰。杜詩韓筆愁來讀。似倩麻姑搔處抓。夫同此筆也。用以作字作詩作文。俱要抓着古人搔處。即抓著自己搔處。若將此筆。作詩作文。與作字畫。俱成一不痛不癢世界。會須早斷此臂。有何用哉。

【譯】古人云ふ、筆有り墨有りと。筆墨の二字、人多くは曉らず。畫豈に筆墨無からんや。但だ輪廓有りて皴法無きは、即ち之を筆無しと謂ふ。皴法有りて輕重・向背・雲影・明晦無きは、即ち之を墨無しと謂ふ。王思善曰く、筆を使うて、反つて筆に使はる可からず。故に曰く、石は三面を分つと。此語は是れ筆、亦是れ墨なり。

凡そ畫に、畫筆の大小蟹爪を用ふる者、點花染筆の者、蘭と竹とを畫く筆の者有り。寫字の兎毫湖穎を用ふる

者、羊毫雪鵝柳條の者有り。慣れて毫尖に倚る者有り。專ら禿筆を取る者有り。其性習に各〻相近き有るに視ふ。未だ一を執る可からず。

鹿柴氏曰く、雲林の、關仝に倣ふは、正鋒を用ひずして、乃ち更に秀潤なり。關仝は實に正鋒なり。李伯時は、書法極めて精し。山谷謂ふ、其畫の關鈕、書中に透入すと。則ち書も亦畫中に透る。錢叔寶は、文太史の門に遊び、日に其の筆を搦りて書を作るを見て、其畫筆益〻妙なり。夏昶は、陳嗣初・王孟端と相友とし善し。毎に文に臨み草を見るに於て、竹法愈〻超えたり。文士と黨陶するは、實に筆力を資くること少からず。又、歐陽文忠公は、尖筆乾墨を用ひて、方濶の字を作り、神采秀發す。之を觀れば、其の清眸疊頰にして、進趨晴如たるを見るが如し。徐文長は、醉後に寫字の敗筆を拈じて、拭桐の美人を作り、卽ち筆を以て兩頰を染め、而して丰姿絶代にして、轉た世間の鉛粉の垢たるを覺ゆ。珠、掌中に撒し、神、化外に遊ぶと謂ふ可し。書と畫と均しくして岐致無し。寧ろ惟だ是のみならず、南朝の詞人は、直に文を謂つて筆と爲す。沈約の傳に曰く、謝元暉は善く詩を爲り、任彥章は筆に工なりと。庾肩吾曰く、詩は既に此の如く、筆又之の如しと。杜牧之曰く、杜詩韓筆愁へ來りて讀めば、麻姑を倩うて癢處を抓かしむるに似たりと。夫れ同じく此筆なり。用ひて以て字を作り詩を作り文を作る、俱に古人の癢處を抓著せんことを要す、卽ち自己の癢處を抓著す。若し此筆を將て、詩を作り文を作ると、字畫を作ると、俱に一の不痛不癢の世界を成さば、會ず須く早く此臂を斷つべし。何の用か有らんや。

【註】有筆有墨、圖繪宗彝に曰く、描處、其筆を糊突する、之を墨有りと謂ふ。水筆、描法を動かさゞる、之を筆有りと謂ふと。○王思善、王繹は元の人、字は思善、自ら癡絕と號す。其先は睦の人、杭の新門に居る。年十二三にして已に丹青を能くし、亦、眞を寫すを解す。特に小像に長じ、徒だ其形似を得るのみならず、兼ねて其神氣を得たり。采繪法を著はして人に授く。○石分三面、石を描くには三面を書き分けるを要す。石の向背の備はれるをいふ。○大小蟹爪者、蟹の爪の如き形の大筆と小筆。○點花、花を描く筆。○染筆、くまどりする筆。○寫字、文字を書く。○兎毫湖穎、香祖筆記に曰く、今、吳興の兎毫は、佳なる者は直百錢。又、近日、湖州は專ら羊毛を用ひ、殊に柔輭にして骨無く、形貌も亦醜しと。○雪鵝柳絮、筆の名なるも未だ詳かならず。○毫尖、さきのきく筆。○禿筆、さきの切れたる筆。○性習、性質習慣。○正鋒、直筆のこと。○秀潤、優秀にして潤澤あること。○李伯時、李公麟は、宋の人、字は伯時、龍眠居士と號す。人物を寫すこと尤も精し。識者以て顧愷之・張僧繇の亞と爲す。又、山水を畫き、李思訓に似たり。○山谷、黃庭堅は宋の人、字は魯直、山谷と號し、又、涪翁と號す。詩は專ら杜甫を學び、宋代の大家たり。又、行草書を善くし、亦、世に名有り。○關鈕、關は、くわんのき。鈕は印鼻なり、提繫の處を謂ふ。印の手でつまみ持つところ。關鈕は、しめくゝりの急處にたとふ。○錢叔寶、錢穀は明の人、字は叔寶、磬室と號す。吳の人なり。少くして孤貧、壯に迨んで始めて書を讀むを知る。家に典籍無し。文待詔の門下に游び、日〻に架上の書を取りて之を讀む。其餘功を以て水墨を點染し、沈氏の法を得たり。○文太史、文徵明は、明の人、名は璧、字を以て行はる。更めて徵仲と字す。長洲の人。衡山居士と號す。貢せられて京師に至り、翰林待詔を授けらる。性、畫を喜む。然れども肯て規規として摸擬せず。古人の妙蹟に遇へば、惟だ其意を覽觀して、心を師として自ら詣

り、輒ち神會意解し、微妙の處を窮むるに至る。天眞爛熳にして、古人に減せず。○夏昶、明の人、初の名は昶、太宗、名を昶と改む。字は仲昭、崑山の人。永樂乙未の進士、詞垣に入り、中書舍人に改められ、正統中、太常卿に至る。王紱を師として竹石を畫き、當時第一と爲す。○陳嗣初、陳繼儒は、明の人、字は嗣初、經學に精しく、人呼んで陳五經と爲す。○王孟端、王紱は明の人、字は孟端、友石と號し、又、九龍山人と號す。無錫の人。洪武の初、能書を以て薦められて翰林に入り、中書舍人に擢でらる。山水は蒙を師とし、長江・遠山・叢篁・怪石、絶妙ならざる無し。畫竹は當時第一と爲す。○文士、學者をいふ。○歐陽文忠公、宋の歐陽脩、字は永叔、六一居士と號す。宋一代の文宗たり。卒して文忠と諡す。○尖筆、細き筆。○乾墨、かすれたる墨。○方潤字、幅廣き文字。○徐文長、明の徐渭は、字は文清、更めて文長と字し、天池と號す。山陰の諸生なり。山水人物花蟲竹石、超逸にして致有り、行草書に於て尤も精奇偉傑なり。嘗て言ふ、吾は書第一、詩二、文三、畫四と。識者、之を許す。○寫字敗筆、文字を書く損じたる筆。○拭桐美人、琴を彈く美人。○鉛粉、白粉。女の化粧するをいふ。○岐致、二つに分れたる道。○沈約、梁の沈約は、字は休文、武康の人、詩文を能くし、著述最も富む。武帝に仕へ、官、侍中に至る。著はす所、宋書等有り。又、四聲韻譜を撰す。字を分ちて平上去入の四聲と爲すこと、約より始まる。○謝元暉、謝朓は、南北朝の南齊の陽夏の人、字は玄暉、こゝに玄を元と書せるは、康熙帝の諱を避けたるなり。少くして學を好み、美名有り。文章清麗なり。草隸を善くし、五言詩に長ず。曾て宣城の太守と爲る、故に世、謝宣城と稱す。○任彥章、任昉は、南朝の梁の博昌の人、字は彥章。八歲にして能く文を屬る。王儉・沈約、皆、之を稱す。武帝の時、黃門侍郎と爲り、出でゝ義安の太守と爲る。著はす所の文章。世に名有り。○庾肩吾、唐の人、字は愼之、幼にして能く詩を賦す。嘗て書品論を作る、亦、佳致有り。○杜牧之、唐の杜牧は、字は牧之。詩文を善くす。人、小杜と號す。○杜詩韓筆、杜子美の詩、韓退之の文章。以上三つの引用文は、南朝より唐に至るまでの文人が文章を筆と謂ふことの例として引くなり。○麻姑、仙人の名。列仙傳に云ふ、麻姑は、年、十七八の女子の若く、指の爪の長さ數寸。或は之を見て、其の痒きを爬く可きを意へば、忽ち鐵鞭有り、其背を笞つと。

【解】 古人は、筆有り墨有り、筆力と墨色とが兼ね備はらなければならぬ、と曰つて居る。然るに筆と墨との二字を、多くの人は了解してゐない。畫には筆と墨との無い者は無い。しかし輪廓のみ有つて皴法の無い者は、それを筆無しと謂ふ。皴法は有るけれども輕重向背雲影明晦の無い者は、それを墨無しと謂ふ。王思善は曰つて居る、筆を使ふべきである、筆に使はれてはならぬ。それ故に、石を描くには三面を書き分ける、と曰ふのであると。此言葉は、筆を說き、亦、墨を說いて居る。

凡そ畫を書くに、畫筆の蟹の爪の如き形の大筆・小筆を用ひる人もある。花を描く筆を用ひる人も有る。隈どりの筆を用ひる人も有る。蘭と竹とを畫く筆を用ひる人も有る。文字を書くに用ひる兎の毛の筆や、湖州の筆や、羊毛の雪鵞柳絮の筆を用ひる人

も有る。さきの利く筆を使ひ慣れて居る人も有る。さきの切れた筆ばかりを用ひる人も有る。これは、その性質習慣によつて各〻其の好む所を用ひるのであつて、一概に如何な筆が善いと定めることは出來ぬ。

鹿柴氏曰ふ、倪雲林は關仝を學んだが、直筆を用ひずして、一層優秀潤澤である。關仝は實に直筆を用ひてゐた。李伯時の書法は極めて精妙であつたが、黄山谷は之を評して、李伯時の畫のしめくゝりの急處が、書の中に透つて入つたのである、と曰つて居る。して見ると、書も亦、畫の中に透つて入るべきである。錢叔寶は、文太史の門下に在つて、日々に太史が筆を持つて文字を書くのを見て、叔寶の畫筆はます〳〵精妙になつた。夏昶は、陳嗣初・王孟端と親友であつて、毎に本を讀んだり文字を書くのを見たりしたので、畫竹の竹がます〳〵超絶するに至つた。學者と親しく交はるときは、實に筆力の助けになることが少くないのである。又、歐陽文忠公は、細い筆とかすれ墨とで、幅の廣い文字を書いたが、氣韻のすぐれて高いものであつた。それを觀ると、歐公が眸清く頰豐かに、進退動作の立派なのを見るが如くである。徐文長は、嘗て醉後に破損したる寫字の筆を取つて、琴を彈ずる美人を

畫き、それから筆を以て兩頰を染めたが、風采絶世であつて、世間の極彩色の美人畫はむさくるしいやうに思はれた。これは他の故では無い、全く其筆が精妙なるが爲めである。筆使ひがこの境致に至ると、眞珠を掌の中からまきちらし、精神は造化の外に遊んで居ると謂つても善い。書法と畫法とは、二つの道では無い。唯だそれのみでは無い、文章の道も同じいのである。南朝の詞人は、直に文を筆と謂つて居る。沈約の傳に、謝元暉は善く詩を爲り、任彦章は筆に工なり、と曰つてある。これは南朝で文を筆と謂つた例である。唐人も文を筆と曰つて居る。庾肩吾は、詩既に此の若し、筆も又之の如し、と曰つて居る。杜牧之は、杜詩韓筆愁へ來つて讀めば、麻姑を倩うて癢處を抓かしむるに似たり、と曰つて居る。これは唐人が文を筆と謂つた例である。同じく此筆であつて、それを用ひて或は文字を書き、或は詩を作り、或は文章を作るのであるが、いづれにしても、古人の癢い處を抓くことが肝要である。それは即ち自己の癢い處を抓くことになる。若し此筆を以て詩を作り文を作るにしても、文字を書き繪畫を書くにしても、痛くも無く癢くも無い者であるならば、須く早く此臂を斷ち切つてしまふべきである。何の役にも立たぬのであ

る。

用墨

李成惜墨如金。王洽潑墨瀋成畫。夫學者必念惜墨潑墨四字。於六法三品。思過半矣。

鹿柴氏曰。大凡舊墨。祇宜畫舊紙。倣舊畫。以其光鋩盡斂。火氣全無。如林逋魏野。俱屬典型。允宜並席。若將舊墨施於新繒。金箋。金筤之上。則翻不若新墨之光彩直射。此非舊墨之不佳也。實以新楮繒難以相受。有如置深山有道之淳古衣冠於新貴暴富座上。無不掩口胡盧。臭味何能相入。余故謂舊墨留畫舊紙。新墨用畫新繒。金楮。且可任意揮灑。不必過惜耳。

【譯】 李成は墨を惜むこと金の如く、王洽は墨瀋を潑して畫を成す。夫れ學者必ず惜墨潑墨の四字を念へ。六法・三品に於て、思、半に過ぎん。

鹿柴氏曰く、大凡舊墨は、祇だ宜しく舊紙に畫き舊畫に倣ふべし。其光鋩盡く斂まり火氣全く無きを以てなり。林逋・魏野の俱に典型に屬し、允に宜しく席を並ぶべきが如し。若し舊墨を將て、新繒・金箋・金筤の上に施さば、則ち翻つて新墨の光彩直射するに若かざらん。此れ舊墨の佳ならざるに非ざるなり。實に新楮繒の以て相受け難きを以てなり。深山の有道の淳古の衣冠を新貴暴富の座上に置くが如き有り、口を掩うて胡盧せざる無し。臭味何ぞ能く相入らん。余故に謂ふ、舊墨は留めて舊紙に畫き、新墨は用ひて新繒・金楮に畫くと。且つ意に任せて揮灑す可し。必ずしも過惜せざるのみ。

【註】 惜墨如金、形の上では、少しづゝ幾回にも墨をかけることであり、又、心がけとしては、濃墨淡墨いやしくもせず、之を貴ぶこと金の如くなれ、と云ふ意味にもなる。圖繪宗彙に曰く、畫を作るには墨を用ふること最も難し。但だ先づ淡墨を用ひ、稍く觀る可きに至つて、然る後に焦墨・濃墨を用ひて、畦逕遠近を分ち出す。故に生紙上に在りて、許多の滋潤の處有り。李成、墨を惜むこと金の如しとは、是れなりと。○王洽潑墨瀋成畫、墨瀋を潑すとは、墨の汁をそゝぎちらすこと。多く墨汁を用ふるなり。唐朝名畫錄に曰く、王洽、性、酒を好み、凡そ圖障を畫かんと欲すれば、先づ飲み、醺酣の後、卽ち墨を以て潑し、或は笑ひ或は吟じ、脚蹙まり手抹し、或は揮ひ或は拭ひ、或は淡く或は濃く、其形狀に隨つて、山と爲し石と爲し、雲と爲し水と爲し、手に應じ意に隨ひ、倏として造化の如く、雲霞を圖し出し、風雨を染め成し、宛も神巧の如く、俯して觀れば其墨汚の迹を見ず。皆、奇異なりと謂ふと。○光鋩、墨のつや。○火氣、墨のあく。○林逋、宋の人、字は君復、性恬淡にして古を好み、榮利に趣らず。卒して諡を和靖先生と賜ふ。○魏野、宋の人、字は仲先、吟咏を好み、閒達を求めず、卒する年六十。詔して祕書省著作郎を贈る。○胡盧、クス〳〵笑ふ。

【解】 李成は墨を惜しむこと金の如くであつた。王洽は墨の汁を潑ぎ散らして畫を成した。畫を學ぶ人は、必ず惜墨潑墨の四字を善く工夫すべきである。さうすれば、六

法と三品との事が、大略了解されるであらう。

鹿柴氏曰ふ、大體、舊い墨は、ただ舊い紙に畫き舊い畫を摸寫するに宜しい。墨の光澤が盡く斂まり、墨のあくが全く無くなつて居る爲めである。たとへば林逋と魏野とは俱に隱君子であり、同じ型の人であるので、同席しても宜しいと同じいのである。若し舊い墨を以て、新しい絹や金紙や金扇の上に用ひたならば、却つて新しい墨の光まばゆきほどなるに及ばぬのである。それは新しい紙や絹が舊い墨を受け付け難い爲めである。たとへば深山に隱棲せる有道の君子の淳樸古風なる衣冠を、新に高貴の位に昇つた人や、暴に鉅萬の富を累ねた富豪の席上に置くやうな者で、何人も口を掩うてクス〳〵笑ふであらう。趣味が到底一致しないのである。それ故に余は、舊い墨は留めて舊い紙に畫き、新しい墨は新しい紙や金紙に畫くべし、と謂ふのである。且つ意ふままに筆を揮つて畫くべきであり、必ずしも大層惜しむに及ばぬのである。（貴きこと金の如しと雖も、金も亦惜むに足らぬ場合あるべきだらう。）

重潤渲染

畫石之法。先從澹墨起。可改可救。漸用濃墨者爲上。董源坡脚下多碎石。乃畫建康山勢。先向筆畫邊皴起。然後用澹墨破其深凹處。著色不離乎此。石著色要重。董源小山石謂之礬頭。山中有雲氣。皴法要滲軟。下有沙地。用澹墨掃。屈曲爲之。再用澹墨破。

夏山欲雨。要帶水筆暈開山石。加澹螺青於礬頭。更覺秀潤。○以螺青入墨。或藤黃入墨畫石。其色亦浮潤可愛。○冬景。借地爲雪。以薄粉暈山頭。濃粉點苔。○畫樹。不用更重。幹瘦枝脆。卽爲寒林。再用澹墨水重過加潤之。則爲春樹。○凡畫山。著色與用墨。必有濃澹者。以山必有雲影。有影處必晦。無影有日色處必明。明處澹。晦處濃。則畫成儼然雲光日影浮動於中矣。○山水家畫雪景多俗。嘗見李營丘雪圖。峰巒林屋。畫以澹墨爲之。而水天空濶處。全用粉塡。亦一奇也。○凡打遠山。必以香朽擬其勢。然後以青以墨一一染出。初一層色澹。後一層略深。最後一層又深。蓋愈遠者。得雲氣愈深。故色愈重也。○畫橋梁及屋宇。須用澹墨潤一二次。無論著色與水墨。不潤卽淺薄。○王叔明畫。有全不設色。只以赭石澹水潤松身。略勾石廓。便丰采絕倫。

【譯】 石を畫くの法、先づ澹墨より起し、改む可く救ふ可くして、漸く濃墨を用ふる者を上と爲す。董源の坡脚下に碎石多きは、乃ち建康の山勢を畫くなり。先づ筆畫の邊に向つて皴起し、然る後に澹墨を用ひて、其深凹の處を破る。著色も此を離れず。石の著色は重きを要す。董源の小山石は、之を礬頭と謂ふ。山中に雲氣有るは、皴法、滲軟なるを要す。下に沙地有るは、澹墨を用ひて掃ひ、屈曲して之を爲し、再び澹墨を用ひて破る。

夏山、雨ふらんと欲するには、水を帶ぶる筆をもて山石を暈開するを要す。澹螺青を礬頭に加ふれば、更に秀潤なるを覺ゆ。○螺青を以て墨に入れ、或は藤黃を墨に入れて石を畫けば、其色、亦、浮潤にして愛す可し。○冬景は、地を借りて雪と爲し、薄粉を以て山頭を暈し、濃粉をもて點苔す。○樹を畫くには、更に重きを用ひず、幹瘦せ枝脆なるは、卽ち寒林と爲す。再び澹墨水を用ひて重過して之を加潤すれば、則ち春樹と爲る。○凡そ山を畫くに、著色と用墨と、必ず濃澹有る者は、山には必ず雲影有るを以てなり。影有る處は必ず晦く、影無くして日色有る處は必ず明かなり。明かなる處は澹く、晦き處は濃くすれば、則ち畫成りて儼然として雲光日影、中に浮動す。○山水家、雪景を畫くに多くは俗なり。嘗て李營丘の雪の圖を見しが、峰巒林屋、盡く澹墨を以て之を爲し、而して水天空濶の處は、全く粉を用ひて塡す。亦一奇なり。○凡そ遠山を打するには、必ず香朽を以て其勢を擬し、然る後に青を以て墨を以て一一染め出す。初の一層は色澹く、後の一層は略ぼ深く、最後の一層は、又深し。蓋し愈〻遠き者は、雲氣を得ること愈〻深し、故に色愈〻重きなり。○橋梁及び屋宇を畫くには、須く澹墨を用ひて潤すこと一二次すべし。著色と水墨とを論ずる無く、潤さゞれば卽ち淺薄なり。○王叔明の畫に、全く色を設けず、只だ赭石・澹水を以て松身を潤し、略ぼ石廊を勾する有り、便ち丰采絕倫なり。

【註】 重潤渲染、淡い墨の使ひ方を說くのである。渲染するには重ねなければならず、重ねるのは潤すためである。○起、書き始めること。○坡脚下、山坡の下。○碎石、細かなる石。○建康、六朝の舊都、今の南京。○礬頭、畫山水の法、山上に小石塊有りて堆を成せるを、之を礬頭と謂ふ、と輟耕錄に見ゆ。○澹螺青、淡き藍なり。○香朽、木炭。

【解】 石を畫く方法は、最初に淡い墨でさら〳〵と皴を書き始める。初から其凹凸の處や明暗の處を出さうとするにも、淡い墨でさへ書いて置けば、後に自由に改められる。改めるといふは、補つて行くといふやうな意味と考へて宜しい。救ふといふは、初めから濃い墨で書いて無いのだから、凸處にすることも、凹處にすることも自在に出來る、救ふといふ意味にもなる。さうして漸次に濃い墨を用ひて描いて行くのを、上分別とす。これは古畫に就いての實際の話だが、董源の山水畫に、土坡の下部に小さい石がごろ〳〵して居るのは、建康地方の山水の形勢の寫意である。その董源の畫は、筆畫、最初に山なり石なりを畫くのに、皴を書き始め、やがて淡い墨でその深く

凹んで影になつた處をつくつてゐる。著色も其方法を離れないでやつてゐる。これは實際上さう云ふ方法で石なり山なりを描いた場合は、その墨の用法の強弱の關係から、著色も單に染澹の方でなく、少し重く厚く用ひなければならぬ。董源の小山石は、礬頭と云ひ慣してゐる。その畫山水に雲氣を漂はさうとするには、皴法、山の皴を書く時からして、水を含ませて潤ひ滲みるやうにしておくことを要する。山脚など水に臨んでゐて、そこが沙地とか或は水が乾いてゐる樣などを描くときは、淡墨でさつと書くのだが、それも勿論山脚の屈曲してゐればゐるやうに書くのであり、一遍では墨の味がただ乾燥して見えるから、再び薄い墨でそれを補ふのである。

夏の山が雨を催さんとするさまを描くには、自然水氣を帶びさせなければならない。さういふ場合には、前に淡墨其他で描いた山や石へ水を含んだ筆で暈を施し、それに澹螺青、即ち淡き藍を加へれば、潤ひが出て來る。○藍を墨に入れ、或は雌黄や艸の汁を墨に加へて石を畫くと、その潤ひの色あひが善いものである。○冬の雪の景を畫く場合には、絹地の白いところを應用して雪にする。山の頂などへは、淡い胡粉をぬり、あとで濃墨で點を打つて、その上へ濃い胡粉でぽつり〳〵と又點を加へてあるなど、慣用手段で、よく見かける描法である。○樹木を畫くには、初めから重く、今の言葉で云ふ強く描かずに置く。幹は乾いた墨などで瘦せた心もちに描き、隨つて枝も脆く、脆くと云ふよりは、さら〳〵と瘦せた筆致で描くと、冬の林のやうに見える。それへ、淡墨などで幾へんも潤澤を加へると、自然に春らしい風情になる。○凡そ山を畫くに、著色と用墨と必ず濃淡有るは云云は、一寸別の言葉のやうだが、今の人に解り易く言つて見れば、空に雲が浮動してゐると、その影が向うの山を暗くしたり、こちらの谷を明るくしたり、山の中腹が明るいかと思へば、山の頂が暗かつたりして、氣象萬千の變化である。そこで山水圖を仕上げるときに至つての著色や又は墨を加へて行く場合、白白と拔いておけば、そこは太陽のあたつて居る明るい處であり、又濃墨或は淡墨を加へてゆく個處は、太陽のかげつて居る處に見えると云ふ意味である。

○山水家、雲景を畫くこと、多くは俗なり云云は、批評のやうな文章である。その俗と云ふ字の意義は、人各々の修養やら趣味やらで常に動搖するもので、これは俗である、これは雅であると、手つ取り早く說明することは出來ない者である。著者王安節が嘗て見た李營丘の雪景の圖は、高尙で善かつた。それには、山峰は皆淡墨で描いて、

空は一面に胡粉でうめてあつたと云ふのである。○凡そ遠山を寫すには、先づ木炭を以てその山勢をはかつて、それから墨で描き起し、或は青、艸の汁とか綠青の類とかで、一一染め出して行くのである。初の一層の山は淡い色を用ひ、後の一層の山は少しく濃くし、最後の一層の山は一層濃くする。だん〳〵に濃くするのは、後になればなるほど雲氣が益々深いので、色が益々重くなるのである。橋や家を描くには、潤ひのある淡墨で畫くと、實際上親しみのあるものである。あとで彩色するときも、水氣を含んだ色を施してあるのが、よく見かける處で善いものである。○王叔明の畫に、全く彩色を施さず、ただ赭石と淡水だけで松の幹を潤し、石の輪廓だけへ赭石と淡水を施したのがあつたが、その趣は素晴しく善かつた。（山水の描法を、かなり平易に說明して居るが、其代り此の通りに行けば、古臭い型の物しか出來ない、遠い山ほど色の濃くなる道理は無い、とも思はれるし、太陽の光線の明暗を、其まゝ寫したら、妙な南畫が出來上るだらう。却つて突起せる處に濃墨を使ふ、逆手のやうな機略に、東洋畫の妙處がある。此章あたりには、殊に支那人の通癖たる型式泥古の風あることを、讀者も感じて貰ひたい。）

天地位置

凡經營下筆。必留天地。何謂天地。有如一尺半幅之上。上留天之位。下留地之位。中間方主意定景。竊見世之初學。遽爾把筆。塗抹滿幅。看之塡塞人目。已覺意阻。那得取重於賞鑒之士。

鹿柴氏曰。徐文長論畫。以奇峰絕壁。大水懸流。恠石蒼松。幽人羽客。大抵以墨汁淋漓。烟嵐滿紙。曠若無天。密如無地爲上。此語似與前論未合。曰。文長乃瀟灑之士。卻於極塡塞中。具極空靈之致。夫曰曠若。曰密如。於字句之縫。早逗露矣。

【譯】凡そ經營して筆を下すには、必ず天地を留む。何をか天地と謂ふ。一尺半幅の上にも、上に天の位を留め、下に地の位を留め、中間に方に意を主として景を定むるが如き有り。竊に見るに世の初學、遽爾として筆を把り、滿幅を塗抹す。之を看れば人目を塡塞し、已に意阻むを覺ゆ。那ぞ重きを賞鑒の士に取るを得んや。鹿柴氏曰く、徐文長、畫を論じ、以へらく、奇峰絕壁、大水懸流、恠石蒼松、幽人羽客は、大抵、墨汁淋漓として、烟嵐、紙に滿ち、曠として天無きが若く、密にして地無きが如きを以て上と爲すと。此語は前論と未だ合はざるに似たり。曰く、文長は乃ち瀟灑の士にして、卻つて極めて塡塞する中に於て、極めて空靈なるの致を具ふ。夫れ曠若と曰ひ、密如と曰ひ、字句の縫に於て、早く逗露せり。

【註】天地位置、圖取りの配置に就いて說くなり。○經營、圖取りを工夫すること。○主意定景、畫かんと欲

する趣意を主要として圖取りを定める。○塗抹滿幅、一面に塗りまはす。○塡塞、ふさぐ。○意阻、嫌になる。○取重于賞鑒之士、畫を鑑賞する眼識ある人に譽められること。○大水、大なる川。○懸流、瀑。○惟石、大なる石。○蒼松、古き松。○幽人、隱者。○羽客、仙人。○墨汁淋漓、墨のしたゝるばかりなるを云ふ。墨色の盛なること。○烟嵐、雲烟山氣。○曠、畫面の廣きを形容す。○密、隙間なく一面に書かれたるをいふ。○極塡塞、極めて滿ち塞がる。畫幅の隅から隅まで隙間無きほどに物を畫かれたるをいふ。○極空靈、極めて空虛靈妙なるなり。○字句之縫、縫はぬひめ。字句の間の意。○逗露、もらし、あらはす。

【解】例へば山水圖を畫くとせば、一尺半尺の者の上にも、天地の位置を先づ考へておき、中間を中景にするとか、或は雲烟等にするとか、肚構へをきめてから描き始むべきである。初學者などの、落著かない心もちのままに、そそくさと筆を飛ばして書きなぐつたやうな者は、經營卽ち構想の上の阿呑、緩急の妙が無いから、鑑賞するのに、徒らに滿幅塗抹の跡がこちらの心もちを塞いでしまつて、更に面白くないのである。

鹿柴氏曰ふ、徐文長は畫を論じて、前の論とは反對に、墨痕淋漓、奇怪なる山や樹木や、或は仙人や隱者、さういふ類の一種世間離れのしたやうな者を描き出すには、天地の位置とか、遠近布置とか、その他自然風物の約束を無視した者が面白い、と云ふやうな事を言つて居る。但し徐文長は、灑落自由な心もちの人であるから、むやみに書きなぐつて居るやうでも、それぞれ緩急宜しきを得て居るのである。論文の文字の間に、ちら〳〵と其意は漏れあらはれて居るのである。前の論と徐文長の說と、眞意に於ては矛盾するところは無い。

破邪

如鄭顚仙。張復陽。鍾欽禮。蔣三松。張平山。汪海雲。吳小仙。於屠赤水畫箋中。直斥之爲邪魔。切不可使此邪魔之氣繞吾筆端。

【譯】鄭顚仙・張復陽・鍾欽禮・蔣三松・張平山・汪海雲・吳小仙の如き、屠赤水の畫箋の中に於て、直に之を斥けて邪魔と爲す。切に此邪魔の氣をして吾が筆端を繞らしむ可からず。

【註】鄭顚仙、明の閩の人、人物山水を畫く。○張復陽、明の張復、字は復陽。道士なり。秀水の南宮に居る。畫は吳仲圭に倣ひ、山水人物草木俱に能品に入る。初め儒を業とし、棄て去つて朱艮菴に從つて道を學ぶ。詩を善くす。幼より書を學び、專ら古人を法とし、善く帚を運らして大字を作る。○鍾欽禮、明の鍾禮、字は欽禮、南越山人と號し、又、一塵不到處と號す。上虞の人なり。宏治中、仁智殿に直たり。好んで山水を圖し、頗る妙境に臻る。少きとき孤にして力學す。書は子昂を法とす。○蔣三松、明の蔣嵩、三松と號す。金

陵の人。山水人物、多く焦墨を以て之を爲り、尺幅の中、寸山匀水、悉く化境に臻る。○張平山、明の張路、字は天馳、平山と號す。大梁の人なり。庠生を以て太學に遊び、人物は吳偉を學び、山水は戴進の風致有り、花鳥亦工に、北人視ること拱璧の如し。○汪海雲、明の汪肇、字は德初、海雲と號す。休寧の人なり。豪放不羈なり。山水水物は、戴進・吳偉に出入し、餌毛花卉は、自ら一家を成す。○吳小仙、明の吳偉、字は次翁、小仙と號す。江夏の人、性戇直にして氣岸有りて豪放なり。畫を以て名有り、山水人物、蒼勁なり。○屠赤水、明の屠隆、字は長卿、赤水と號す。束髮より觚を操り、一世を睥睨す。その著に考槃餘事有り。畫箋は其書中の篇名なり。

【解】 鄭顒仙・張復陽・鍾欽禮・蔣三松・張平山・汪海雲・吳小仙等の畫は、屠赤水の畫箋の中に於て、直に之を排斥して邪魔としてゐる。(考槃餘事の畫箋の中には、『皆畫家の邪學にして、徒らに狂態を逞しくする者なり。俱に取るに足る無し』と曰つてある。) 斷じて此邪魔の氣が自分の筆の先を纏繞するやうなことがあつてはならぬ。

去俗

筆墨間。寧有穉氣。毋有滯氣。寧有霸氣。毋有市氣。滯則不生。市則多俗。俗尤不可侵染。去俗無他法。多讀書。則書卷之氣上升。市俗之氣下降矣。學者其愼旃哉。

【譯】 筆墨の間に、寧ろ穉氣有るも、滯氣有る毋かれ。寧ろ霸氣有るも、市氣有る毋かれ。滯なれば則ち生きず。市なれば則ち俗多し。俗は尤も侵染す可からず。俗を去るには他の法無し。多く書を讀めば、則ち書卷の氣上升し、市俗の氣下降す。學者其れこれを愼めよ。

【解】 筆墨の間に、筆や墨の運びの跡が穉拙なのは愛す可きであるが、澁滯したものになるのは困る。澁滯するときは生動しない。霸氣といふのは、謂はば腕に任せてこれ見よがしに筆を運んだ者である。市氣とは、賣りたい、買つて貰ひたいで書く畫のことである。これでは自然に俗惡になるものである。澤山書物を讀めば、自ら古賢の心が己の心に浸潤して俗で無くなるのである。(所謂書卷の氣なるものだが、學問無くして甚だ俗氣市氣なき作家もあり、ウンと本を讀んで居て、市氣匠氣の脫けぬ人もあり、一樣には斷じられない事であらう。)

設色各法

鹿柴氏曰。天有雲霞。爛然成錦。此天之設色也。地生草樹。斐然有章。此地之設色也。人有眉目唇齒。明皓紅黑。錯陳於面。此人之設色也。鳳擅苞雞吐綬。虎豹炳蔚其文。山雉離明其象。此物之設色也。司馬子長援據尙書。左傳。國策諸書。古色燦然。而成史記。此文章家之設色也。犀首張儀。變亂黑白。支辭博辯。口橫海市。舌捲蜃樓。務爲鋪張。此言語家之設色也。夫設色而至於文章。至於言語。不惟有形。抑且有聲矣。嗟乎大而天地。廣而人物。麗而文章。贍而言語。頓成一著色世界矣。豈惟畫然。卽淑躬處世。有如所謂倪雲林澹墨山水者。鮮不唾面。鮮不噴飯矣。居今之世。抱素其安施耶。故卽以畫論。則研丹摭粉。稱人物之精工。而澹黛輕黃。亦山水之極致。有如雲橫白練。天染朱霞。峰矗曾青。樹披翠罽。紅堆谷口。知是春深。黃落車前。定爲秋晚。胸中備四時之氣。指上奪造化之功。五色實令人目聰哉。

又曰。王維皆青綠山水。李公麟畫白描人物。初無淺絳色也。昉於董源。盛於黃公望。謂之曰。吳裝。傳至文沈。遂成專尙矣。○黃公望斂倣虞山石面色善用赭石。淺淺施之。有時再以赭筆勾出大概。○王蒙多以赭石和藤黃著山水。其山頭喜蓬蓬鬆鬆畫草。再以赭色勾出。時而竟不著色。又以赭石著山水中人面及松皮而已。

【譯】鹿柴氏曰く、天には雲霞有り、爛然として錦を成す。此れ天の設色なり。地には草樹を生じ、斐然として章有り。此れ地の設色なり。人には眉目唇齒有り、明皓紅黑、面に錯陳す。此れ人の設色なり。鳳は苞を擅にし、雞は綬を吐き、虎豹は其文を炳蔚にし、山雉は其象を離明にす。此れ物の設色なり。司馬子長は、尙書・左傳・國策の諸書に援據し、古色燦然として、史記を成す。此れ文章家の設色なり。犀首・張儀は、黑白を變亂し、支辭博辯にして、口、海市を橫たへ、舌、蜃樓を捲き、務めて鋪張を成す。此れ言語家の設色なり。夫れ設色して文章に至り、言語に至れば、惟だ形有るのみならず、抑も且つ聲有るなり。嗟乎、大にして天地、廣くして人物、麗にして文章、贍にして言語、頓に一の著色の世界を成す。豈に惟だ畫のみ然らんや。卽し躬を淑くして世に處するも、謂はゆる倪雲林の澹墨山水の如き者有らば、面に唾せざるもの鮮く、飯を噴かざるもの鮮からん。今の世に居りて素を抱くは、其れ安にか施さんや。故に卽し畫を以て論ずれば、則ち丹を研り粉を摭べて、人物の精工と稱せられ、而して澹黛輕黃、亦、山水の極致なり。雲、白練を橫たへ、天、朱霞を染め、峰、曾青を矗くし、樹、翠罽を披き、紅、谷口に堆くして、是れ春の深きを知り、黃、車前に落

ちて、定めて秋晩と爲し、胸中に四時の氣を備へ、指上に造化の功を奪ふが如き有らば、五色は實に人目をして聰ならしむるかな。

又曰く、王維は皆青綠の山水、李公麟は盡く白描の人物、初め淺絳色無きなり。董源に昉まり、黄公望に盛なり。之を謂つて吳裝と曰ふ。傳へて文沈に至りて、遂に專尙を成す。○黄公望の皴は、虞山の石面に倣ひ　色善く赭石を用ひて、淺淺に之を施す。時有りて再び赭筆を以て大概を勾し出す。○王蒙は多く赭石を以て藤黄に和して山水に著く。其山頭は喜んで蓬蓬鬆鬆として草を畫き、再び赭色を以て勾し出す。時としては竟に色を著けず、又、赭石を以て山水中の人面及び松皮に著くるのみ。

【註】設色、彩色なり。○斐然有章、斐然は美くしき貌。章はいろどり。色彩の美くしきをいふ。論語公冶長篇に、斐然として章を成す、とあるに本づく。○錯陳、いりまじりてつらなる。○鳳擅苞、鳳凰の羽毛の色の美くしきをいふ。論語摘衰聖に、鳳に九苞有り、とあり。九苞とは、鳳凰の羽の色彩凡そ九色聚まるをいふ。○鷄吐綬、七面鳥の色彩の美くしきをいふ。○虎豹炳蔚其文、虎や豹の皮の斑紋ありて美くしきをいふ。易經革卦に、大人は虎變す、其文炳なり。君子は豹變す、其文蔚なり、とあり。○山雉離明其象、雉の羽毛の色彩の美くしきをいふ。易經本義に、雉は文明の物にして、離の象なり、とあり。○司馬子長、司馬遷は、前漢の武帝の時の人、字は子長、史記百三十卷を撰す。○犀首、公孫衍なり、魏の人、戰國の遊說の士なり。○張儀、魏の人、戰國の遊說の士なり。○支辭博辯、能辯なるをいふ。○海市、蜃樓、並に蜃氣樓なり。○淑躬、言行の謹愼なるをいふ。○噴飯、ふきだして笑ふ。○抱素、素樸粗野なるをいふ。○其安施耶、何處にも用ふべきところなきをいふ。○研丹摶粉、丹は丹砂、卽ち硃砂なり。粉は胡粉なり。色々な繪具を用ふること。○澹黛輕黄、うすい青色、うすい黄色。これも種々の繪具を用ふるをいふ。○白練、白い練り絹。○朱霞、朝やけ夕やけをいふ。○曾青、幾重にも重なれる青色。○翠闕、みどりなる毛ごろも。綠色なる樹葉を形容す。○紅堆谷口、山谷の間に花の咲きたるを形容す。○黄、秋になつて黄色になりたる葉をいふ。○五色實令人目聰哉、聰の字疑ふ可し。聰は耳に用ひ、目に用ひず。恐らくは明に作るべきならん。○淺絳色、うすい彩色なり。藍と岱赭とを水墨山水の上へ施して、明暗を分つ一種の著色法なり。○吳裝、吳道子風との意。圖畫見聞志に曰く、吳道子の畫は、古今一人のみ。愛寶稱す、前に顧陸を見ず、後に來者無しと。其れ然らずや。嘗て畫く所の牆壁卷軸を觀るに、落筆雄勁にして、傅采簡淡なり。或は牆壁の間の設色重き處有れば、多くは是れ後人裝飾せるなり。今に至るまで、畫家、輕く丹青を拂ふ（淡く繪具を用ふ）者有れば、之を吳裝と謂ふと。○文沈、文徵明と沈石田。○專尙、もつぱらたつとぶ。專ら淺絳色のみを用ふるをいふ。○虞山、今の江蘇省常熟縣の西北に在る山。昔、周の虞仲、此に治す、故に名づく。○蓬蓬鬆鬆、草の亂れ茂りたるさま。

【解】鹿柴氏曰の第一章は、畫に彩色の必要なることを論ずるのである。天にも彩色有り、地にも彩色有り、人に彩色有り、萬物にも彩色有り、文章にも彩色有り、言語にも彩色有り、天地の間、如何なる者にも彩色の無い者は無い。畫にも必ず彩色が有らねばならぬ。若し人物畫、山水畫、四時の風景畫などに、巧妙なる彩色有らば、

之を觀る者をして心目爽快ならしむ、と言ふのである。

鹿柴氏又曰ふ、王維の畫は、皆青綠山水であり、李公麟の畫は、皆、白描の人物であり、初めには淺絳色の畫は無かつた。淺絳色の畫は、董源より始まり、黃公望に盛になつた。畫家は、之を吳裝と謂つて居る。傳へて文徵明・沈石田に至つて、遂に專ら淺絳色を用ひるやうになつた。○黃公望の皴は、虞山の石の表面に倣つたのであるが、色は善く岱赭を用ひて、淡く塗つてゐる。時としては更に岱赭の筆を以て、大略を書き出してゐる。○王蒙は、多くは岱赭を雌黃に混和して山水に著けてゐる。其山の頭には、喜んでもさ〳〵と草を描き、更に岱赭を加へて居る。時としては全く彩色をせず、只だ岱赭を山水の中の人の顏と松の皮とに著けて居るだけである。

石青

畫人物可用滯笨之色。畫山水則惟事輕清。石青只宜用所謂梅花片一種。以其形似故名。取置乳鉢中。輕輕着水乳細。不可太用力。太用力則頓成青粉矣。然即不用力。亦有此粉。但少耳。研就時傾入磁盞。略加清水攪勻。置少頃將上面粉者撇起。謂之油子。油子只可作青粉。用着人衣服中間一層是好青。用畫正面青綠山水者。底一層顏色太深。用以嵌點夾葉。及襯絹背。是之謂頭青。二青。三青。凡正面用青綠者。其後必以青綠襯之。其色方飽滿。

有一種石青。堅不可碎者。以耳垢少許彈入。便研細如泥。墨多麻亦用此。出巖栖幽事。

【譯】人物を畫くには、滯笨の色を用ふ可し。山水を畫くには、則ち惟だ輕清を事とす。石青は只だ宜しく謂はゆる梅花片の一種を用ふべし。其形似たるを以ての故に名づく。取つて乳鉢の中に置き、輕輕に水を著けて乳細す。太だ力を用ふ可からず。太だ力を用ふれば、則ち頓に青粉と成る。然れども卽し力を用ひずとも、亦、此粉有り、但だ少きのみ。研り就すの時、傾けて磁盞に入れ、略ぼ清水を加へて攪勻し、置くこと少時にして、上面の粉なる者を將て撇起す、之を油子と謂ふ。油子は只だ青粉と作して用ひて人の衣服に著く可し。中間の一層は是れ好青なり。用ひて正面の青綠山水を畫く。底に著ける一層は、顏色太だ深し。用ひて以て夾葉を嵌點し、及び絹背に襯す。是れを之れ頭青・二青・三青と謂ふ。凡そ正面に青綠を用ふる者は、其後必ず青綠を以て之を襯し、其色方に飽滿す。

一種の石青の堅くして碎く可からざる者有り、耳垢少許を以て彈じ入るれば、便ち研細なること泥の如し。墨に麻多きにも、亦、此を用ふ。岩栖幽事に出づ。

【註】石青、群青。○滯笨之色、重くるしき色。○輕清、あつさりしたる色。○青粉、白群といふ。○攪勻、かきませること。○撇起、こぼし出す。字書に、撇は引く也、拋棄する也、とあり。○油子、うはずみをい

ふ。今の群青で云へば、一番上の上澄みを白群と云ひ、中層は薄群と云ひ、中間色の群青である。底澄みの分は、粗く色も濃く、これは一口に群青とも、紺群青とも云つて居る。本文に頭青・二青・三青とあるのが、それ等に相當するのである。○嵌黠夾葉、樹木の葉の輪廓を描いて、その中をこの群青で塗るのである。○襯絹背、裏繪具のこと。絹の裏から繪の具を塗ることである。たとへば青綠山水は、多くの場合、白群・薄群や白綠などを用ひて著色すれば、色が淡いから、墨で書いた皴などが消えずに表現が出來るけれど、若し濃い群青などを用ひると、骨描たる墨の大切な皴が消えるが、若しそれを裏から用ひると、一種豐滿なる色が畫面に現れて來るのである。○岩栖幽事、書名、陳眉公の著。

【解】人物を畫くには、重くるしい色を用ひる可きであり、山水を畫くには、專らあつさりした色を用ひる可きである。群青は、只だ梅花片といふ一種を用ひるが宜しい。形が似て居るので、梅花片と名づけられて居る。それを乳鉢の中に置き、少しづつ水を入れて乳棒を以て擦つて細かにする。大層力を入れてはいけない。力を入れ過ぎると、青粉になつてしまふ。けれども若し力を入れなくても、青粉が出來るには出來るけれども、分量が少いのである。十分に研り終つたときは、乳鉢から傾けて瀨戸物の皿の中に入れ、少しばかり清水を入れてかきまはす。それから暫くそつとして置いて、上ずみの粉末になつて居る者をこぼし出して他の容れ物に入れておく。之を油子と謂ふ。油子は、只だ青粉として用ひて人の衣服などに著色するに用ひる可きである。また ん中の一層は、好い群青であり、正面の青綠山水を畫くに用ひる。底に著いて居る一層は、色が大層濃いのであつて、二重書きの葉に塗りつけたり、絹の背に塗りつけるに用ひる。この上層・中層・下層の三種を頭青・二青・三青と謂ふ。凡そ正面に群青・綠青を用ひるときは、其後に必ず群青・綠青を裏面から塗りつける。さうすると飽滿なる色彩が現はれるのである。

一種の群青で、堅くして碎くことの出來ない者が有るが、それには耳垢（みみくそ）を少しばかり混入すると、泥の如くに細かく研り碎かれる。墨に麻（あは）の多いのも、さうすると宜しい。これは岩栖幽事に出て居る。（今は畫家自ら石を碎いて繪の具を取らず、皆商店に出來合つて居て、調法は調法だが、時として摸造品などを掴む危險がある。石から繪の具を取つた時代の方が、仕事は手堅かつた。と云つて出來合ひのあるものを、わざわざ石を碎くわけにも行くまいが、此の章などを讀んで、繪の具の成立を知り置くも、徒事では無からう。）

石綠

研石綠。亦如研石青法。但綠質甚堅。先宜以鐵椎擊碎。再入乳鉢內。用力研方

細。石綠用蝦蟇背者佳。亦水飛作三種。分頭綠二綠三綠。用亦如用石青之法。

青綠加膠。必須臨時。以極清膠水投入碟內。再加清水。溫火上略鎔用之。用後即宜撇去膠水。不可存之於內。以損青綠之色。撇法用滾水少許。投入青綠內。并將此碟子安滾水盆內。須淺。不可沒入。重湯頓之。其膠自盡浮於上。撇去上面清水。則膠淨矣。是之謂出膠法。若出不淨。則次遭取用。青綠便無光彩。若用則臨時再加新膠水可也。

【譯】 石綠を研るは、亦、石青を研る法の如し。但だ綠質甚だ堅し。先づ宜しく鐵椎を以て擊ち碎くべし。再び乳鉢の中に入れ、力を用ひて研りて方に細なり。石綠は蝦蟇背なる者を用ひて佳なり。亦、水飛して三種と作し、頭綠・二綠・三綠に分つ。用ふることも亦、石青を用ふるの法の如し。

青綠に膠を加ふるは、必す須く時に臨んで、極清の膠水を以て碟內に投入し、再び清水を加へ、溫火の上に略ぼ鎔かして之を用ふべし。用ひて後には卽ち宜しく膠水を撇去すべし。之を內に存して以て青綠の色を損す可からず。撇法は、滾水少許を用つて、青綠の內に投入し、此碟子を并せ將つて、滾水の盆內に安く。須く淺かるべく、沒入す可からず。重湯に之を頓けば、其膠自ら盡く上に浮ぶ。上面の清水を撇去すれば卽ち膠淨し。是れを之れ出膠の法と謂ふ。若し出すこと淨からざれば、則ち次遭に取り用ふるとき、青綠便す光彩無し。若し用ふれば則ち時に臨んで再び新膠水を加へて可なり。

【註】 石綠、綠青のこと。○鐵椎、かなづち。○頭綠、今、青一番・二番などいふ綠青。○二綠三綠、今、白二番・白三番或は白綠青と云ふ。○滾水、熱湯。○次遭、次回。

【解】 綠青を研るのは、群青を研ると同じ方法を用ひる。但し綠青の質の甚だ堅い者は、先づ鐵椎を以て擊ち碎くが宜しい。それから乳鉢の中に入れて、力を入れて研つて始めて細かくなる。綠青は、蝦蟇の背のやうな形の者を用ひるのが佳い。綠青も、群青と同じ方法で水飛して三種とする。即ち頭綠・二綠・三綠に分けるのである。その用ひ方も、群青を用ひる方法と同じい。

群青や綠青に膠を加へるには、必ず使用する時に臨んで、極淡い膠水を、繪具皿の中に入れ、それから清水を入れて、溫火の上に置いて、鎔解させてそれを用ひるのである。用ひ終つた後には、膠水を捨ててしまふが宜しい。膠水を皿の中に殘しておくと、群青や綠青の色が惡くなるのである。膠水を捨て去る法は、熱湯少しばかりを群青又は綠青の皿の中に入れ、この皿を、熱湯を入れたる盆の中に置く。熱湯の盆の中に繪具皿を置くには、淺く置くことを要する。熱湯の盆の中に繪具皿がもぐり込むやうであつてならぬ。斯く暫く湯煎にしておくと、群青又は綠青は下へ沈

澱し、膠は自然に盡く水の上面に浮き上る。上面の清水を捨て去るときは、膠はきれいに無くなるのである。これが膠を出す法である。若し殘らず膠を出し去つてしまはぬときは、次回に用ひるときに群青や綠青に光澤が無くなる。若し後日用ひるときは、その時に臨んで、再び膠水を加へるが宜しい。

朱砂

用箭頭者良。次則芙蓉塊。疋砂。投乳鉢中研極細。用極清膠水。同清滾水傾入盞內。少頃將上面黃色者撇一處。曰朱標。着人衣服用。中間紅而且細者。是好砂。又撇一處。用畫楓葉欄楯寺觀等項。最下色深而麤者。人物家或用之。山水中無用處也。

【譯】箭頭なる者を用ひて良し。次は則ち芙蓉塊・疋砂なり。乳鉢の中に投じて研りて極めて細にし、極清の膠水を用ひて、清滾水と同じく傾けて盞內に入れ、少頃にして上面の黃色なる者を將て一處に撇す。朱標と曰ふ。人の衣服に着けて用ふ。中間の紅にして且つ細なる者は、是れ好砂なり。又、一處に撇す。用ひて楓葉・欄楯・寺觀等の項を畫く。最下の色深くして麤なる者は、人物家或は之を用ふ。山水の中には用ふる處無きなり。

【註】○朱砂、朱なり。本草集解に、朱砂は辰州・宜州・階州に出づ。而して辰砂を最と爲す。とあり。又、砂は石上に生じ、其大塊は鷄子の如く、小なる者は石榴子の如く、狀は芙蓉頭・箭鏃の若し。とあり。○疋砂、疋は當に蛋に作るべし。鳥の卵を蛋と謂ふ。鳥の卵の如き形の朱砂なり。○朱標、上面の黃色なる者にして、今で謂ふ丹の黃口なり。○中間紅而且細者、これは今では赤口の朱と云つて居る。

【解】朱砂は箭鏃の形の者を用ひるが良い。それに次いで芙蓉の蕾の形の者・鳥の卵の形の者が宜しい。いづれも、乳鉢の中に入れて研つて極めて細かくし、極めて清き膠水を用ひ、清き熱湯と共に、傾けて皿の內に入れる。暫くして上ずみの黃色なる者を、別の容器に傾けて入れておく。これは朱標と曰ふ。人の衣服に著色するときに用ひる。中間の紅色にして且つ細なる者は、好い朱である。又、傾けて別の容器に入れておく。紅葉や欄檻や寺觀などの著色に用ひる。一番下の色が濃くて且つ麤い者は、人物畫家は、之を用ひることが有るけれども、山水畫家は、用ひる處が無いのである。

銀朱

萬一無朱砂。當以銀朱代之。亦必用標朱。帶黃色者。水飛用之。水花不入選。近日銀朱多摻入小粉。不堪用。

【譯】萬一、朱砂無ければ、當に銀朱を以て之に代ふべし。亦必ず標朱を用ふ。黃色を帶ぶる者は、水飛して之を用ふ。水花は選に入らず。近日の銀朱は、多く小粉を參入し、用ふるに堪へず。

【註】銀朱、人造の朱なり。○水花、うはみづなり。

【解】萬一、朱砂が無いときは、銀朱（人造の朱）を代用するのであるが、これも亦必ず朱標を用ふべきである。黃色を帶びたる者は、水飛して之を用ひる。しかし、うは水は用ひることは出來ない。近日製造される銀朱は、多くは小さい粉を雜せてゐるので、使ひものにならぬ。

珊瑚末

唐畫中。有一種紅色。歷久不變。鮮如朝日。此珊瑚屑也。宣和內府印色。亦多用此。雖不經用。不可不知。

【譯】唐畫の中に、一種の紅色有り、久しきを歷れども變せず、鮮かなること朝日の如し。此れ珊瑚屑なり。宣和の內府の印色にも、亦多く此れを用ふ。用を經ずと雖も、知らざる可からず。

【註】宣和、宋の徽宗皇帝の年號。○內府、天子の御くら。

【解】唐代の畫の中に、一種の紅色の、歲月久しきを經過すれども色變化せず、鮮かなること朝日の如き者が有る。此れは珊瑚の屑を繪具として用ひたのである。宋の徽宗皇帝の御藏の印の色にも、これを用ひたものが多い。これは今日用ひられぬことであるけれども、知つて置かねばならぬ事である。

雄黃

揀上號通明雞冠黃。研細水飛之法。與硃砂同。用畫黃葉。與人衣。但金上忌用。金箋著雄黃。數月後即燒成慘色矣。

【譯】上號の通明なる鷄冠黃を揀び、研細し水飛するの法は、硃砂と同じ。用ひて黃葉と人衣とを畫く。但し金の上には用ふることを忌む。金箋に雄黃を著くれば、數月の後に卽ち慘色を成す。

【註】通明鷄冠黃、雄黃の塊方數寸にして、明徹にして雞冠の如き者を佳と爲す。

【解】上等の透き通るやうな雞冠黃を揀んで研つて細末とする。水飛する法は、硃砂と同じい。これを用ひて、黃ばみたる葉や人の衣服などに著色する。但し金の上には用ひてはならぬ。金紙の上に雄黃を著けるときは、數月の後に、燒けて、きたならしい色に成つてしまふ。

石黃

此種山水中不甚用。古人卻亦不廢。妮古錄載。石黃用水一碗。以舊蓆片覆水碗上置灰。用炭火煆之。待石黃紅如火。取起置地上。以碗覆之。候冷細研調。作松皮及紅葉用之。

【譯】 此種は、山水の中に甚だしくは用ひず。古人は卻つて亦廢せず。妮古錄に載す、石黃は水一碗を用ひて、舊蓆片を以て水碗の上を覆うて灰を置き、炭火を用ひて之を煆き、石黃の紅なること火の如きを待ちて、取り起して地上に置き、碗を以て之を覆ひ、冷ゆるを候つて細研して調ふ。松皮及び紅葉を作るに之を用ふ。

【註】 石黃、鑛物の名。大體、雄黃と同類の者で、雄黃の一名を石黃といふほどである。畫家の顏料として雄黃と石黃とを分けてゐるのは、精麁の區別に過ぎないであらう。一說に、雄黃は、山の陽より出づ、是れ丹の雄なり。雄黃と名づくる所以なり。又、石門に出づる者を石黃と名づく。又、石黃の中の精明なる者を、雄黃と爲すと。○妮古錄、書名、陳眉公の撰する所。

【解】 石黃は、今は山水畫の中に多くは用ひられないが、古人は屢〻石黃を用ひた。妮古錄に曰つてある、石黃は、水を盛りたる碗の中に入れ、舊い蓆の切れを以て碗の上を覆ひ、灰を置き、炭火を以てそれを燒く。碗の中の石黃が紅にして火の如くなるのを待つて、取り出して地の上に置き、碗を其上にかぶせ、冷たくなるのを待つて研つて極細かくして繪具として用ひる。松の皮や紅葉などを畫くときに之を用ひて著色すると。

乳金

先以素蓋稍抹膠水。將枯徹金箔。以手指剪去指甲。醮膠。一一粘入。用第二指團團摩揚。待乾粘碟上。再用清水滴許揚開。屢乾屢解。以極細爲度。膠水不可多。多則浮起不容細擂。只以溫而可粘爲候。再用清水。將指上及碟上。一一洗淨。俱置一碟中。以微火溫之。少頃金沈。將上黑色水。盡行傾出。曬乾碟內好金。臨用時稍稍加極清薄膠水。調之。不可多。多則金黑無光。又法。將肥皂核內剝出白肉。鎔化作膠。似更輕清。

【譯】 先づ素蓋を以て稍や膠水を抹し、枯徹の金箔を將て、手指指甲を剪り去るを以て膠に醮し、一一粘入し、第二指を用ひて團團として摩揚し、乾きて碟上に粘するを待つて、再び清水滴許を將て揚開し、屢〻乾かし屢〻解き、極細を以て度を爲す。膠水は多きを著く可からず。多ければ則ち浮起して細擂す容からず。只だ溫うして粘す可きを以て候と爲す。再び清水を用ひて、指上及び碟上を將て、一一洗淨し、俱に一碟の中に置き、微火を以て之を溫む。少頃にして金沈む。上の黑色の水を將て、盡行く傾け出し、碟內の好金を曬し乾かす。用ふる時に臨んで、稍稍に極清の薄膠水を加へて之を調ふ。多くす可からず。多ければ則ち金黑くして光無し。又の法、肥皂の核內より剝出せる白肉を將て、鎔化して膠と作せば、更

に輕清なるに似たり。

【註】乳金、金をとく方法を說明するなり。○素盞、白き血。○指甲、指の爪。○團團摩搨、ぐる〳〵とすりつける。○搨開、すりひろげる。○洗淨、あらひおとす。○微火、少しの火。○肥皂核、大粒のさいかちのたね。○白肉、しろみ。○鎔化、あたためてとかす。

【解】先づ白い皿へ少しばかり膠をたらし、よく乾き切つた、謂はば古渡りの金箔を入れ、べつたり膠へ漬けずに、少しづつ膠をひたしてはこすり、第二指を以てぐるぐるとすりつけ、やがて乾いて皿へはりつくのを待つ。それから水を少しばかりたらして、どろりとさせ、又乾かす。これを屢〻繰り返すうちに極細になる。(膠や水は澤山入れてはならぬ。澤山入れると、金が浮き上つて細に擂ることが出來ぬ。ただ濕うてはり附くことの出來るのを以て適度とする。)細かくなつた時も、皿にはり附くやうにして置いて、さてそれへ、今度はたつぷりと水を注ぎ、指や皿のふちに著いてゐるのを、その皿の中へ洗ひ落し、その皿をうす火で溫める。暫くすると金は沈澱する。上澄みのきたない水は殘らずこぼし捨て、底に沈んだ好い金を皿の中で晒し乾かすのである。金を使用する時には、極々少量の薄い膠の水をたらし、指で研ぎ出すやうにしてこすると、光が出る。初めから澤山に膠の水を入れると、研ぐやうな呼吸に行かぬから、金が黑みを帶びて光が出ないのである。又一法には、大粒のさいかちの核の內から取り出した白肉を鎔かして膠として用ひると、一層あつさりした光が出るといふことである。

傅粉

古人率用蛤粉。法以蛤蚌殼煆過。研細。水飛用之。今閩中下四府堊壁。尙多用蚌殼灰。以代石灰。猶有古人遺意。今則畫家概用鉛粉矣。其製以鉛粉將手指乳細。醮極淸膠水。於碟心摩擦。待摩擦乾。又醮極淸膠水。如此數十次。則膠粉渾鎔。搓成餅子。粘碟一角。曬乾。臨用時。以滾水洗下。再淸淸滴膠水數點。撇上面者用。下則拭去。研粉必須手指者。以鉛經人氣。則鉛氣易耗耳。

【譯】古人は率ね蛤粉を用ふ。法、蛤蚌の殼を以て煆過し、研細し、水飛して之を用ふ。今、閩中の下四府の堊壁は、尙ほ多く蚌殼の灰を用ひて、以て石灰に代へ、猶ほ古人の遺意有り。今は則ち畫家概ね鉛粉を用ふ。其製、鉛粉を以て、手指を將て乳細し、極淸の膠水に醮し、碟心に於て摩擦し、摩擦して乾くを待つて、又、極淸の膠水に醮す。此の如くすること數十次なれば、則ち膠と粉と渾鎔す。搓して餅子を成し、碟の一角に粘

じて曬し乾かす。用ふる時に臨んで、滾水を以て洗下し、再び清清に膠水數點を滴らし、上面なる者を撤して用ふ。下なるは則ち拭ひ去る。粉を研るに必ず手指を須ふるは、鉛は人氣を經れば則ち鉛氣耗し易きを以てなるのみ。

【註】傅粉、胡粉の使用法を說く。○蛤粉、はまぐりの粉。我が國では牡蠣の殼で製すと聞く。○蛤蚌殼、はまぐりのから。○煆過、十分に燒く。○閩中、今の福建省。○堊壁、しらかべ。○鉛粉、おしろい。○碟心、皿の眞中。○渾鎔、まじりてとける。○搓、ひねる。○餅子、團子。○一角、一方の隅。○耗、減ること。(胡粉なども、此文のやうに昔はなか〳〵面倒な者であつたらしいが、今日では精撰した者が有り、その上に使用するばかりに出來てゐるチューブ入りの者まで有る世の中だから、こんな面倒な事をする人はあるまい。)

【解】古人は大抵、蛤の粉を用ひてゐた。其法は蛤の貝殼を十分に燒いて、研つて極細かくして、水飛してそれを用ひたのである。今、福建省の管下の四府の白壁は、まだ多くは蛤の貝殼の灰を用ひてゐるが、それは猶ほ古人の遺風が有るのである。今日は、畫家は概して鉛粉を用ひて居る。其調製法は、手の指を以て鉛粉を極細かくして、極めて清潔なる膠水にひたし、皿の眞中に於てよく練る。練つて乾くのを待つて、又、極めて清潔なる膠水にひたす。此の如くすること十數回すると、膠と粉とが十分に雜つて鎔ける。やがて搓つて團子を作り、それを碟の隅へへばり著けておいて、晒し乾かすのである。使用する時に臨んで、熱湯で洗ひおとし、更に清潔なる膠水數滴をたらして、又指でとき下し、その上澄みを傾けて別の皿へ入れて、それを用ひる。下澄みは滓だから拭き取つて捨ててしまふ。鉛粉を研るには必ず指を用ひるのは、鉛分は身體に觸れると消耗し易い性質の者で有るからである。

調脂

諺云。藤黃莫入口。臙脂莫上手。以臙脂上手。其色在指上經數日不散。非用醋洗不退。須用福建臙脂。以少許滾水略浸。將兩筆管。如染坊絞布法。絞出濃汁。亦須澄出木綿之細渣滓。溫水頓乾用之。

【譯】諺に云はく、藤黃は口に入るゝこと莫かれ。臙脂は手に上すこと莫かれと。臙脂を以て手に上せば、其色、指上に在りて、數日を經れども散せず、醋を用ひて洗ふに非ざれば退かず。須く福建の臙脂を用ひて、少許の滾水を以て略ぼ浸し、兩つの筆管を將て、染坊が布を絞る法の如くにして、濃き汁を絞り出し、亦須く木綿の細き渣滓を澄出すべし。溫水にて頓に乾かして之を用ふべし。

【註】調脂、猩臙脂のこしらへかたを說く。○藤黃、雌黃なり。○染坊、染め物屋。

【解】諺に、雌黃は口に入れるな、猩臙脂は手に觸れるな、と曰つてゐる。雌黃は毒

だからである。臙脂は、手で持つと、色が指に著いて、幾日たつても落ちない、醋を以て洗はなければ落ちないのである。臙脂は福建產の者が善いのであり、それを少量の熱湯の中に程善く浸し、二本の筆の軸とか竹の箸とかいふやうなもので、染物屋が染物を絞るやうに、濃き汁を絞り出し、臙脂を包んであつた木綿のむら〳〵した滓をも奇麗に除き去るを要する。その汁を皿に入れて、湯煎にて一氣に乾かし、皿に附著させておいて、それを用ひるのである。

藤　黃

本草釋名。載郭義恭廣志。謂岳鄂等州崖間海藤花蘂敗落石上。土人收之。曰沙黃。就樹採擷。曰蠟黃。今訛爲銅苗。爲蛇矢。謬甚。又周達觀眞臘記云。黃乃樹脂。番人以刀斫樹枝。滴下。次年收之者。其說雖與郭異。然亦皆言草木花與汁也。從無蟒蛇矢之說。但氣味酸有毒。蛀牙齒貼之即落。舐之舌麻。故曰莫入口耳。當揀一種如筆管者。曰筆管黃。最妙。

舊人畫樹。率以藤黃水入墨內。畫枝幹。便覺蒼潤。

【譯】本草釋名に、郭義恭の廣志を載せ、謂はく、岳鄂等の州の崖間の海藤花の蘂、石上に敗落し、土人、之を收むるを、沙黃と曰ひ、樹に就きて採擷するを、蠟黃と曰ふ。今訛りて銅苗と爲し、蛇矢と爲すは、謬ること甚だしと。又、周達觀の眞臘記に云はく、黃は乃ち樹脂なり。番人、刀を以て樹枝を斫りて滴り下り、次の年に之を收むる者なりと。其說、郭と異なりと雖も、然も亦皆、草木の花と汁とを言ふなり。從つて蟒蛇矢の說無し。但だ氣味酸にして毒有り。蛀牙齒に之を貼くれば卽ち落ち、之を舐れば舌麻る。故に、口に入るゝこと莫かれと曰ふのみ。當に一種、筆管の如き者を揀ぶべし。筆管黃と曰ふ。最も妙なり。

舊人、樹を畫くに、率ね藤黃水を以て墨の內に入れて、枝幹を畫く。便ち蒼潤なるを覺ゆ。

【註】藤黃、雌黃なり。○本草釋名、書名。○郭義恭、人名。○廣志、書名。○岳鄂、岳州は今の湖南省岳陽縣。鄂州は今の湖北省武昌縣。○採擷、つみとる。○銅苗、銅の出來かゝりたるものゝ意。○蛇矢、蛇の糞。○周達觀、周處、字は達觀。元の人。其著に眞臘風土記あり。眞臘はカンボチヤなり。○樹脂、木のやに。○蟒蛇矢、うはばみの糞。○蛀牙齒、蟲齒。○麻、麻痺するなり。

【解】藤黃に就いて、本草釋名の中に、郭義恭の廣志を引用して、岳州・鄂州等諸州の崖の間に咲いて居る海藤花の蘂が石の上に散り落ちたのを、土地の人が採收したのを、沙黃と曰ひ、樹から摘み取つたのを、蠟黃と曰ふ。然るに今誤つて銅の出來かかつた者であると曰ひ、蛇の糞の化したものであると曰つて居るのは、甚だしい誤である。と曰つてある。又、周達觀の眞臘風土記の中には、藤黃は樹の脂である。蕃人が

刀を以て樹の枝を斫ると、脂がその斫り口から滴り落ちて來る、それを次の年に採集したものである、と曰つてある。周氏の說は、郭氏の說と異なつて居るけれども、いづれも、草木の花と汁とであると言ふのであり、從つて蟒蛇の糞であるといふ說は無い。但し藤黃の味は酸くして毒が有り、齲齒にそれを貼けると、齒が拔けてしまひ、それを甜めると舌が麻痺する。故に、口に入れてはならぬ、と曰ふのである。筆の軸の如き形の者を擇び用ふべきであり、それは筆管黃と曰つて居る。これが最も良い品である。

昔の人は、樹を畫くに、大概、藤黃水を墨の內に入れて、それを以て枝や幹を畫くので、蒼潤なる趣が出て居る。

靛花

福建者爲上。近日棠邑產者亦佳。以漚藍不在土坑。未受土氣。且少石灰。故色迥異他產。看靛花法。須揀其質輕。而青翠中有紅頭泛出者。將細絹篩。摠去草屑。茶匙少少滴水。入乳鉢中。用椎細乳。乾則再加水。潤則又爲擂。凡靛花四兩。乳之必須人力一日。始浮出光彩。再加淸膠水。洗淨杵鉢。盡傾入巨盞內。澄之。將上面細者撇起。盞底色麤而黑者。當盡棄去。將撇起者。置烈日中。一日曬乾乃妙。若次日則膠宿矣。凡製他色。四時皆可。獨靛花必俟三伏。而畫中亦惟此色用處最多。顏色最妙也。

【譯】福建の者を上と爲す。近日、棠邑の產の者も亦佳なり。藍を漚すこと土坑に在らず、未だ土氣を受けず、且つ石灰少きを以て、故に色迥に他の產に異なり。靛花を看る法、須く其質輕くして青翠の中に紅頭の泛び出づる者を揀ぶべし。細絹の篩を將て、草屑を摠し去り、茶匙をもて少少に水を滴らし、乳鉢の中に入れ、椎を用ひて細乳し、乾けば則ち再び水を加へ、潤へば則ち又、擂を爲す。凡そ靛花四兩、之を乳するに必ず人力一日を須ひて、始めて光彩を浮出す。再び淸膠水を加へ、杵鉢を洗淨し、盡く傾けて巨盞の內に入れて之を澄まし、上面の細なる者を將て撇起し、盞底の色麤にして黑き者は、當に盡く棄て去るべし。撇起せる者を將て、烈日の中に置き、一日に曬し乾かせば乃ち妙なり。若し次の日ならば則ち膠宿す。凡そ他の色を製するには、四時皆可なれども、獨り靛花は必ず三伏を俟つ。而して畫中にも亦惟だ此色の用ふる處最も多く、顏色最も妙なり。

【註】靛花、藍なり。○土坑、つちのあな。○紅頭、あかききら。○三伏、夏の土用。

【解】藍は福建に產出する者が最も良い。近頃、棠邑に產出する者も亦佳い。それ等

の地では、の土坑の中で藍を漚さないので、土の氣を受けず、且つ石灰が少い。それ故に色合が他處の產の者とは大に異なつて居る。藍を調製するには、其質の極輕くして青みの中に赤いきらの泛び出て居る者を揀んで、絹の篩で篩つて、塵芥を除き去り、茶匙で少しづつ水をたらして、乳鉢の中に入れて、乳棒を以て擂つて極細かくし、乾けば更に水を加へて潤ほし、又乳棒を以て擂る。凡そ藍四兩を細かくするに、必ず人の力一日を用ひて、始めて光澤が出て來る。こんどは清潔なる膠水を入れて乳鉢や乳棒を洗ひおとし、殘らず傾けて大きい皿の內に入れて、それを澄まし、上部の精細なる者を傾け出して他の皿に入れておき、皿の底の色が粗にして黑い者は、殘らず棄てしまふ。前に傾けて他の皿に入れておいた者を、炎天の日光に晒して、其日の中に乾かしてしまふと、最も妙である。若し一日に乾き切らず、翌日までかゝつて乾かすときは、膠が寢ぐさつてしまふ。凡そ他の繪具を調製するには、春夏秋冬、何時でも善いが、唯だ藍は必ず夏の土用に調製せねばならぬ。そして畫の中にも、此色を用ひる處が最も多いのであり、色合も最も妙である。

草綠

凡靛花六分。和藤黃四分。即爲老綠。靛花三分。和藤黃七分。即爲嫩綠。

【譯】凡て靛花六分に、藤黃四分を和すれば、卽ち老綠と爲る。靛花三分に、藤黃七分を和すれば、卽ち嫩綠と爲る。

【註】草綠、今の人の云ふ草の汁なり。○老綠は、濃き草の汁。○嫩綠は、淡き草の汁。

【解】藍六分に雌黃四分を和せると、夏の老いたる綠の色になる。黃を多くすれば、多くするほど、若葉色になる。

赭石

先將赭石。揀其質堅而色麗者爲妙。有一種硬如鐵與爛如泥者。皆不入選。以小沙盆水研細如泥。投以極清膠水。寬寬飛之。亦取上層。底下所澄蠡而色慘者棄之。

【譯】先づ赭石を將て、其質堅くして色麗はしき者を揀びて妙と爲す。一種の硬くして鐵の如きものと爛にして泥の如き者と有り。皆、選に入らず。小なる沙盆を以て水にて研細して泥の如くし、投ずるに極清の膠水を

以てし、寛寛に之を飛し、亦、上層を取る。底下に澄む所の麤にして色慘なる者は之を棄つ。

【註】赭石、岱赭なり。赭石は代郡より出づる者を代赭と名づく。代は卽ち膈門なり。○沙盆、藥をかけざる皿。擂鉢の類なり。

【解】赭石は、其質の堅くして色の麗はしい者を揀ぶが善い。別に、硬きこと鐵の如き者も有り、どろ〳〵として泥の如き者も有るが、それ等は役に立たぬ。小さい擂鉢の內に置き、水を入れて極細かに研つて泥のやうにし、それに極めて淸潔なる膠水を入れ、ゆつくりと水飛し、これも亦上澄みを取つて用ひる。底に沈澱するところの粗くして色の麗はしくない者は棄ててしまふのである。

赭黃色

藤黃中加以赭石。用染秋深樹木葉色蒼黃。自與春初之嫩葉澹黃有別。如著秋景中。山腰之平坡。草間之細路。亦當用此色。

【譯】藤黃の中に、加ふるに赭石を以てし、用ひて秋深く樹木の葉色の蒼黃なるを染む。自ら春初の嫩葉の澹黃なると別有り。秋景の中の、山腰の平坡、草間の細路に著くるが如きは、亦當に此色を用ふべし。

【註】赭黃色、かば色。○秋深、秋の末。○蒼黃、さびたる黃色。

【解】雌黃の中に岱赭を加へて、それで秋の末の樹木に著色するときは、葉の色がさびたる黃色になつて、自然に春の初の芽出しの葉の淡黃色とは違ふのである。秋の風景の中の山腹の平かなる土坡や草の間の小路などに著色するにも、亦、此色を用ふべきである。

老紅色

著樹葉中丹楓鮮明。烏桕冷豔。則當純用硃砂。如柿栗諸夾葉。須用一種老紅色。當於銀朱中加赭石著之。

【譯】樹葉の中の丹楓の鮮明なる、烏桕の冷豔なるに著くるには、則ち當に純に硃砂を用ふべし。柿栗諸の夾葉の如きは、須く一種の老紅色を用ふべし。當に銀朱の中に於て赭石を加へて之を著くべし。

【註】老紅色、ひはだ色。○烏桕、樹の名、秋葉紅紫にして愛すべし。南京はぜ。○夾葉、ふたへ書きの葉。

【解】樹の葉の中にて、鮮明なる楓葉や、冷豔なる烏桕の葉に著色するには、純粹に朱を用ふべきであるが、柿や栗など諸のふたへ書きの葉には、一種のくすんだ紅色を用ふべきであり、それには銀朱の中に赭石を加へて著色すべきである。

蒼綠色

初霜木葉。綠欲變黃。有一種蒼老黯澹之色。當於草綠中加赭石用之。秋初之石坡土徑。亦用此色。

【譯】初霜の木葉、綠、黃に變せんと欲するには、一種の蒼老黯澹の色有り。當に草綠の中に於て、赭石を加へて之を用ふべし。秋初の石坡土徑にも、亦、此色を用ふ。

【註】蒼綠色、さびくすんだ綠色。

【解】初めて霜の降つた頃の木の葉の、綠色が黃色に變らうとするときには、一種のさびくすんだ色が有る。それには草の汁の中に赭石を加へて著色する。秋の初の石坡や土の小路にも此色を用ひる。

和墨

樹木之陰陽。山石之凹凸處。於諸色中陰處凹處。俱宜加墨。則層次分明。有遠近向背矣。若欲樹石蒼潤。諸色中盡可加以墨汁。自有一層陰森之氣。浮於丘壑間。但硃色只宜澹著。不宜和墨。

余將諸件重滯之色。紛羅於前。而以赭石靛花清淨之品。獨殿於後者。以見赭石靛花二種。乃山水家日用。尋常有賓主之誼焉。丹砂石黛。有如峩冠博帶揖讓雍容。安得不居前席。有師行之法焉。凡出師以虎賁前攻。羽扇幕後。則丹砂石黛皆吾虎賁也。又有德充之符焉。滓穢日以去。清虛日以來。則赭石靛花。又居清虛之府。藝也而進乎道矣。

【譯】樹木の陰陽、山石の凹凸の處には、諸色の中に於て、陰處凹處に、俱に宜しく墨を加ふべし。則ち層次分明にして、遠近向背有り。若し樹石の蒼潤ならんことを欲せば、諸色の中に、盡く加ふるに墨汁を以てす可し。自ら一層陰森の氣有り、丘壑の間に浮ぶ。但だ硃色は宜しく澹く著くべし。宜しく墨を和すべからず。

余、諸件の重滯の色を將て、前に紛羅し、而して赭石・靛花・清淨の品を以て、獨り後に殿とするは、以て、赭石・靛花の二種は、乃ち山水家、日々に用ひ、尋常、賓主の誼有ることを見すなり。丹砂・石黛は、峩冠博帶して揖讓雍容たるが如き有り、安んぞ前席に居らざるを得ん。師行の法有り。凡そ師を出すには虎賁を以て前攻し、羽扇は幕後なり。則ち丹砂・石黛は、皆、吾が虎賁なり。又、德充つるの符有り。滓穢は日々に以て去り、清虛は日々に以て來る。則ち赭石・靛花、又、清虛の府に居る。藝にして而して道に進む。

【註】和墨、墨をまぜること。○層次分明、重なつて居る次第がはつきり分る。○蒼潤、物さびて潤澤あること。○陰森、こんもりしたること。○重滯、重くるしきこと。○紛羅、ならべつらねる。○殿、しんがりとする。最後に戴せたるを言ふ。○賓主、お客と主人。○石黛、茶綠青。石墨の類にして、以て眉を畫く可き者。

○峩冠、高き冠。○博帶、幅廣き帶。○雍容、ゆたかなる形容。○師行之法、軍隊を繰り出す法。○虎賁、武臣の名、王の前後を警備す。○羽扇、大將をいふ。○德充之符、道德、內に充實するときは、自然に外に現はるゝしるし有るなり。德充符は莊子の篇名。○滓穢、かすやきたなきもの、妄想煩惱等にたとふ。○清虛、精神の清淨虛靈なるをいふ。周伯仁曰く、吾、憂ふる所無し。直だ是れ清虛日々に來り、滓穢日々に去るのみと。世說に見ゆ。

【解】樹木のかげひなたや、山や石の凹み凸みの處には、種々の繪具を用ひるのに、ひかげの處と凹みの處には、いづれも、墨をまぜて使ふと宜しい。さうすると、重なつて居る次第がはつきりして、遠近向背が出來る。若し樹や石が物さびて潤澤あるやうにしようとするならば、種々の繪具の中に、皆、墨汁をまぜて用ひると宜しい。さうすると自然に一段とこんもりした氣分が畫山水の間に浮き出すやうになる。但だ朱ばかりは、淡く著けるが宜しい。墨をまぜては宜しくない。

余、諸件の重滯の色を以て云云は、此書の中に、繪具の調製法を說明するに、群青・綠青等を先にして、岱赭・藍を最後にしたる理由を說明するのであり、岱赭と藍とは山水畫家の日常用ふる所にして、賓客と主人との交誼の如しと言ひ、丹砂・石黛などは、公卿百官が高き冠をかぶり大なる帶をしめて、進退坐作悠揚なるが如しと言ひ、丹砂・石黛等を先にして、岱赭・藍を後にせるは、軍隊を繰り出すに、虎賁の士、前に居り、大將、後に居るが如しと言ひ、又、道家の修養にたとへて、滓穢の濁氣日々に去つて、清虛の精氣日々に來るが如しと言ひ、岱赭と藍とを大將にたとへ、又清虛の精氣にたとへたのである。諸種の繪具の中にて、岱赭と藍とを尤も尊重するのである。

絹素

古畫至唐初皆生絹。至周昉韓幹後。方以熱湯半熟。入粉搥如銀板。故人物精彩入筆。今人收唐畫。必以絹辨。見文麤。便云不是唐。非也。張僧繇畫。閻立本畫。世所存者。皆生絹。南唐畫。皆麤絹。徐熙絹。或如布。宋有院絹。勻淨厚密。有獨梭絹。細密如紙。濶至七八尺。元絹類宋。元有宓機絹。亦極勻淨。蓋出吾禾魏塘宓家。故名。趙子昂盛子昭多用之。明絹內府者。亦珍等宋織。古畫絹澹墨色。卻有一種古香可愛。破處必有鯽魚口。連有三四絲。不直裂也。

直裂者僞矣。

【譯】 古畫は、唐の初に至るまで皆生絹なり。周昉・韓幹に至りて後、方に熱湯を以て半ば熟し、粉を入れて搥して銀板の如くす。故に人物の精彩、筆に入る。今人、唐畫を收むるに、必ず絹を以て辨ず。文蠹なるを見れば、便ち、是れ唐にあらず、と云ふは、非なり。張僧繇の畫、閻立本の畫の、世の存する所の者は、皆生絹なり。南唐の畫は皆蠶絹なり。徐熙の絹は、或は布の如し。宋には院絹有り、勻淨厚密なり。獨梭絹有り、細密なること紙の如く、濶さ七八尺に至る。元の絹は宋に類す。元に宓機絹有り、亦極めて勻淨なり。蓋し吾禾魏塘の宓家に出づ。故に名づく。趙子昂・盛子昭多く之を用ふ。明の絹は、內府の者、亦珍なること宋織に等し。

古畫の絹の澹墨色なるは、卻つて一種の古香の愛す可き有り。破るゝ處に必ず鯽魚口有り、連なりて三四絲有り、直に裂げざるなり。直に裂くる者は僞なり。

【註】 周昉、字は仲朗、唐の人。文を喜くし、丹青の妙を窮む。○粉、胡粉なり。○搥、つちにて打つこと。○文蠹、地のあらきこと。○閻立本、立德の弟、圖畫を善くす。秦府の十八學士の圖、及び貞觀中の凌煙閣功臣の圖は、並に立本の筆なり。○徐熙、南唐の人、畫を善くす。花竹林木、蟬蝶草蟲の類、多く園圃に遊びて、以て情狀を求む。蔬菜の莖苗と雖も、亦、圖に入る。寫意、古人の外に出づ。尤も設色を能くす。○院絹、宋の宣和中、畫院にて織りたる絹。○勻淨、むらが無くきれいなこと。○獨梭絹、一丁梭なり。一つの梭にて織りたる絹。○吾禾魏塘、地名なるべきも、所在未詳。○盛子昭、元の盛懋、字は子昭、山水人物花鳥を善くす。始め陳仲美に學び、略ぼ其法を變ず。○內府、帝室の御藏。○鯽魚口、鯽魚（鮒の類）の口の如き形の裂け目。○直裂、縱又は横に眞直に裂けること。

【解】 古代の畫は、唐の初に至るまでは、皆、生絹に畫かれた。周昉・韓幹以後に至つて、始めて熱湯を以て絹を半ば練つて、それから胡粉を入れ、槌を以て搥つて銀の板のやうにした。それ故に人物の精彩が筆に現はれたのである。今日の人が唐代の畫を購求するに、必ず絹を以て鑒別して、若し地のあらい者を見れば、これは唐代の畫でないと云ふのは、誤つて居る。張僧繇の畫や、閻立本の畫の、今日現存して居る者は、皆生絹である。南唐の畫は、皆地のあらい絹である。徐熙の畫の絹は、布のやうにあらい者も有る。宋には畫院で織られた絹が有り、これは、むらが無く奇麗で、地が厚く目が細かい。一丁梭の絹も有り、絲が細くて目がつんでゐること紙のやうであり、幅は七八尺に至つて居る。元の絹は、宋の絹に似て居る。元には宓機絹が有り、これも極めてむらが無く奇麗である。これは吾禾魏塘の宓家で織られたのである。故に宓機絹と曰はれるのである。趙子昂・盛子昭は多く此絹を用ひた。明の絹は、帝

室の御藏の者は、宋の織物と同じく珍重すべきである。

古い畫絹の淡墨の色には、一種の愛す可き古めかしさが有る。破損した處には、必ず鮒の口の如き形の裂け目が有り、數本の絲が連なつて居り、決して縱又は横に眞直に裂けることは無いのである。縱又は横に眞直に裂けて居る者は僞物である。

礬法

絹用松江織者。不在銖兩重。只揀其極細如紙。而無跳絲者。粘幀子（即掙子也。）之上左右三邊。（其邊若緊須打濕粘。不爾則扯不開矣。）幀下以竹簽簽之。以細繩交互纏幀。（莫結死結。）待上礬後。扯平無凹無偏。（然後打死結。）如絹長七八尺。則幀之中間。宜上一撐棍。凡粘絹必俟大乾。方可上礬。未乾則絹脫矣。礬時排筆無侵粘邊。侵亦絹脫矣。即候乾不侵粘處。因梅天吐水。而絹欲脫。則急以礬摻邊上。又萬一侵邊而有處欲脫。則急以竹削鼠牙釘釘之。礬法。夏月。每膠七錢。用礬三錢。冬月。每膠一兩。用礬三錢。膠須揀極明而不作氣者。近日廣膠。多入麩麵假造。不堪用。礬須先以冷水泡化。不可投熱膠中。投入便成熟礬矣。凡上膠礬。必須分作三次。第一次須輕些。第二次飽滿。而清清上之。第三次則以極清爲度。膠不可太重。重則色慘。而畫成多迸裂之虞。礬不可太重。重則絹上起一層白鋪。畫時滯筆。著色無光彩。凡畫青綠重色。畫成時。宜以極輕礬水。以大染筆輕輕托色上。裱時方不脫落。絹背襯處亦然。礬時幀子宜立起。排筆自左而右。一筆挨一筆。横刷。刷宜勻。不使其漬處。一條一條。如屋漏痕。如此細心礬成。即不畫亦屬雪淨江澄。殊可諦玩。若畫遇稍麤之絹。則用水噴濕。石上搥眼匾。然後上幀子礬。

【譯】絹は松江の織りたる者を用ひ、銖兩の重きに在らず、只だ其の極めて細くして紙の如くにして跳絲無き者を揀び、幀子（即ち掙子なり。）の上と左と右との三邊を粘し、（其邊若し緊ならば須く濕を打して粘すべし。解らざれば則ち扯けども開かず。）幀下は竹簽を以て之を簽し、細繩を以て交互に幀を纏ひ、（死結を莫かれ。）礬を上す後を待つて、扯きて平かにして凹無く偏無からしめよ。（然る後に死結を打せよ。）絹の長さ七八尺なるが如きは、則ち幀の中間に、宜しく一撐棍を上すべし。凡そ絹を粘するには、必ず大に乾くを俟つて、方に礬を上す可し。未だ乾かざれば則ち絹脫す。礬する時、筆を排するに粘邊を侵すこと無かれ。侵せば亦絹脫す。即し乾くを候つて、粘處を侵さゞるも、梅天の吐水に因つて、絹脫せんと欲すれば、則ち急に礬を以て邊上に摻せよ。又、萬一、邊を侵して、脫せんと欲する處有れば、則ち急に竹削の鼠牙釘を以て之を釘せよ。礬法、夏月には、膠七錢毎に、礬三錢を用ひ、冬月には、膠一兩毎に、礬三錢を用ふ。膠は須く極明にして氣を作さゞる者を揀ぶべし。近日の廣膠は、多くは麩麵を入れて假造し、用ふるに堪

へず。礬は須く先づ冷水を以て泡化すべし。熱膠の中に投ず可からず。投入すれば便ち熟礬と成る。凡そ膠礬を上すには、必ず須く分つて三次と作すべし。第一次には、須く輕些にすべし。第二次には、飽滿にし、而して清清に之を上す。第三次には則ち極清を以て度と爲す。膠は太だ重くす可からず。重ければ則ち色慘にして、而して畫き成りて迸裂の虞多し。礬は太だ重くす可からず。重ければ則ち絹上に一層の白鋪を起し、畫く時、筆を滯らし、著色に光彩無し。凡そ青綠の重色を畫けば、畫き成る時、宜しく極清の礬水を以て、大染筆を以て輕輕に色の上を托すべし。裱する時、方に脫落せず。絹背の襯處も亦然り。礬する時、幀子は宜しく立起すべし。筆を排するには左よりして右し、一筆、一筆を挨し、横刷せよ。刷するには宜しく匀しくすべし。其の濆す處をして、一條一條、屋漏の痕の如くならしめず。此の如く細心に礬し成れば、卽ち畫かざるも亦、雪淨江澄に屬し、殊に謔玩す可し。若し畫くとき、稍や麤なるの絹に遇はば、則ち水を用ひて噴濕し、石上に眼を拋して匾ならしめ、然る後に幀子に上して礬せよ。

【註】松江、縣の名、今、江蘇省に屬す。○不在銖兩重、目方の重きを貴ばず。○跳絲、うきたる絲。○幀子、枠なり。○竹簽、薄き平たき竹。○死結、容易に解くことの出來ぬ結び方。○上一撐棍、一本の棧を打つ。○梅天吐水、入梅の頃の濕氣。○竹削鼠牙釘、竹釘。○一兩、十錢に當る。○廣膠、ひろすき、と云ふ。○麪麵、小麥粉。○泡化、よく解かすこと。○熟礬、燒き明礬。○大染筆、刷毛。○托、擇ぶ也、見分けて塗ること。○裱、裱裝すること。○絹背襯處、絹の裏より彩色したる處。○噴濕、霧を吹きかけて濕す。

【解】絹は松江で織つた者を用ひ、目方の重いことを貴ばぬ。只だ其の極細かくして紙の如くであつて、浮きたる絲の無い者を擇んで、枠の上と左と右との三箇處を糊で貼り付ける。若し絹の耳が引きつれてゐるならば、少し濕して粘りつけることを要する。さうしなければ、引つ張つても伸びない。枠の下には薄い平たい竹を當てて枠の狂はぬやうにし、細い繩を以てたがひちがひに枠を縛り、細い繩を結ぶには容易く解けるやうにする。固く結んではならぬ。礬水を引いた後に、引つ張つて平かにし、たるみも無く、ゆがみも無いやうにする。そして後に、細き繩を固く結ぶ。若し絹の長さが七八尺も有る時には、枠の中ほどに、一本の棧を打つて置くが宜しい。絹を枠に貼り付けてから、必ず十分に乾いた後に、礬水を引く。まだ乾いてゐない時に、礬水を引くと、絹が枠から離れる。礬水を引くときに、刷毛を使ふのに、貼りつけた處に觸れないやうに注意する。貼りつけた處に礬水の刷毛が觸れると、絹が枠から離れる。若し十分に乾いてから後に礬水を引き、貼りつけた處に觸れないやうにしても、入梅頃の濕氣の爲めに、絹が枠から離れようとするときは、急に明礬の粉を、糊で貼つた上にふりかけるが善い。又、萬一、礬水の刷毛が貼りつけた處に觸れて、絹が離れようとする處が有るときは、急に竹釘を打つておく。礬水の調製法は、夏には膠七錢毎に明礬三錢を用ひる。冬には膠一兩毎に明

礬三錢を用ひる。膠は極すつきりとして悪い臭のしない者を揀ばねばならぬ。近頃出來るひろすきは、多くは小麥粉を入れて贋造したもので、用に立たぬ。明礬は必ず先づ冷水を以て十分に溶かすべきである。熱い膠の中へ入れてはならぬ。熱い膠の中に入れると、燒き明礬になつてしまふ。膠礬を引くには、必ず三回に分けて引く。第一回には、輕く引く。第二回には、たつぷりと、そして奇麗に引く。第三回には、極奇麗に、むらの無いやうにする。膠は餘りに濃くしてはならぬ。餘りに濃くすると、色がきたならしい色になり、そして畫が出來上つた後に、引き裂ける憂が多い。明礬も餘りに濃くしてはならぬ。餘りに濃くすると、絹の上にキラが出來て、畫を書くときに筆が滯り、彩色にも光彩が無い。群青・綠青などの重い色の畫を書くときには、畫が出來上つた時に、大刷毛を以て極薄い礬水を輕く彩色の上に引いておくが宜しい。さうしておくと、裱裝する時に、彩色が脫落しない。絹の裏塗りの彩色にも然うしておくが宜しい。礬水を引く時には、枠は立てかけておくが宜しい。礬水を引くには、左から右に引き、一筆、一筆、隙間の無きやうにして、横に引くが宜しい。そして、むらの無いやうにすべきである。礬水を引いた處が一筋一筋雨漏の痕のやうであつてはならぬ。此の如くに細心に注意して礬水を引くときは、畫を書かずとも、雪の淨きが如く江水の澄みたるが如く美くしく、甚だ愛玩す可きである。若し畫を書くときに少し眼の粗い絹であるならば、水を以て霧を吹いて濕はし、石の上に置いて眼を擊つて平たくして、それから枠に掛けて礬水を引くが善い。

紙　片

澄心堂。宋紙。及宣紙。舊庫疋紙。楚紙。皆可任意揮毫。濕燥由我。惟宣紙中之一種鏡面光。及數揭而麤且薄之高麗紙。雲南之研金箋。與近日之灰重水性多之時紙。則爲紙中之奴隸。遇之。即作蘭竹。猶屬違心也。

【譯】澄心堂・宋紙、及び宣紙・舊庫の疋紙・楚紙は、皆、意に任せて揮毫す可く、濕燥、我に由る。惟だ宣紙の中の一種鏡面光、及び數〻揭げて麤にして且つ薄きの高麗紙、雲南の研金箋と、近日の灰重く水性多きの時紙とは、則ち紙中の奴隸と爲す。之に遇へば、卽ち蘭竹を作るすら、猶ほ違心に屬するなり。

【註】澄心堂、陳後山云ふ、澄心堂は乃ち南唐の烈祖が金陵に節度たるときの燕居なりと。蔡端明云ふ、其物、江南の池歙二郡より出づと。梅聖俞、詩有り、云ふ、江南の李氏、國を有つの日、百金許さず一枚を市ふをと。○宋紙、宋の諸帝、心を翰墨に留む、故に文房の製する所、率ね皆精品なり。蜀には玉版・貢餘・經

屑・表光あり、歙に墨光・氷翼・白滑・凝光あり、越中の竹紙　江南の楮皮紙、温州の綿紙、廣都の竹絲紙、循州の藤紙、常州の雲母紙等あり。○宣紙、安徽省宣城縣より出す所の紙、書畫家の用ふる所たり。唐より以來、皆　貢品と爲す。今、江西にも亦之を產す。○舊庫、ふるき倉庫。○疋紙、長き紙なり。饒州に鄱陽白あり、長さ一疋の絹の如し。近世、白鹿疋紙あり、亦長さ丈餘なりといふ。○楚紙、楚・蜀・滇中の綿紙、瑩薄にして、尤も收藏するに宜しといふ。○鏡面光、光ある紙の名。○數揭、紙を製するに手を拔きたるをいふ。○高麗紙、高麗の繭紙は、膩粉にして喜ぶ可し、と五雜俎に云ふ。○砑金箋、金を塗りたる紙。○灰重、どろを入れたるなり。○水性多、にじむこと。○時紙、當時の紙。○屬意心、思ふやうに行かぬこと。

【解】　澄心堂の紙や、宋代の紙や、宣州の紙や、舊い倉庫に貯へられたる疋紙などは、皆、意に任せて揮毫することが出來、濕ほすも燥かすも自分の思ふやうになる。惟だ宣州の紙の中の鏡面光といふ一種や、紙をすく時に手を拔いて麤くして且つ薄い高麗紙や、雲南より產出する金紙や、近日の泥入りで水のにじむところの今の紙などは紙の中の奴隸である。これ等の紙では、蘭や竹を畫くのでさへも、思ふやうに畫くことは出來ない。

點苔

古人畫。多有不點苔者。苔原設以蓋皴法之慢亂。既無慢亂。又何須挖肉做瘡。然即點苔。亦須於著色諸件一一告竣之後。如叔明之渴苔。仲圭之攢苔。亦自不苟也。

【譯】　古人の畫には、多くは點苔せざる者有り。苔は原設けて以て皴法の慢亂なるを蓋ふ。既に慢亂無くば、又何ぞ肉を挖げて瘡を做すを須ひん。然れば卽ち點苔も亦、須く著色諸件一一、竣を告ぐるの後に於てすべし。叔明の渴苔・仲圭の攢苔の如きも、亦自ら苟くもせざるなり。

【註】　挖肉做瘡、挖は手を以て穴を探るなり。元來瘡の無き奇麗なる皮膚なるに、何處かに瘡は無いかと、深く肉の中まで探し求めて、その爲めに却つて瘡を作り出すことにて、餘計な事をして折角善き者を惡くすることに喩ふるなり。○叔明之渴苔、王叔明の點苔は、多く見かけるのは、渴墨の側筆で、かさ〳〵と打つてある。それを云ふのであらう。○仲圭之攢苔、吳仲圭の點苔は、善い意味での、くしや〳〵と、潤墨で、ぽつり〳〵あつまつたやうに打つてあるのが、遺作に多い。それを云ふのであらう。

【解】　古人の畫には、全く點苔を打つてない者が多くある。大體、點苔は、山や石の皴法が散慢に出來て、しまらなかつた場合にそれを蓋ふときに用ひる。蓋ふと云ふか補ふと云ふか、さういふ時に用ひるのである。皴法がちやんとうまく引きしまつて出來て居れば、わざ〳〵餘計な點苔を用ひるに及ばぬ。して見ると、點苔は、彩色など

の種々の個條がすべて出來上つた後に打つべきである。王叔明の渇苔や、吳仲圭の攢苔などの類も、それ〴〵決して輕忽にしてはゐない。

落款

元以前多不用款。或隱之石隙。恐書不精。有傷畫局耳。至倪雲林字法遒逸。或詩尾用跋。或跋後系詩。文衡山行款清整。沈石田筆法灑落。徐文長詩歌奇橫。陳白陽題誌精卓。每侵畫位。翻多奇趣。近日俚鄙匠習。宜學沒字碑爲是。

【譯】 元以前は、多くは款を用ひず、或は之を石隙に隱す。書の精しからずして畫局を傷ふ有らんことを恐るればなるのみ。倪雲林が字法遒逸なるに至つて、或は詩尾に跋を用ひ、或は跋後に詩を系く。文衡山が行款清整なる、沈石田が筆法灑落なる、徐文長が詩歌奇橫なる、陳白陽が題誌精卓なるは、每に畫位を侵し、翻つて奇趣多し。近日の俚鄙の匠習は、宜しく沒字碑を學ぶを是と爲すべし。

【註】 落款、書畫家、卷上に於て姓名年月或は詩句跋語を題識する、皆、之を落款と謂ふ。○遒逸、健勁にして逸致あるなり。○陳白陽、明の人、名は淳、字は道復。花草清洒なり。尤も寫字に精しく、名を中外に馳す。詩も亦絕技と稱せらる。○沒字碑、たゞ碑のみありて文字無きをいふ。もと、形貌は偉なるも書を知らざるに喩へしなり。後唐の明宗、推協を相とせんと欲す。任圜曰く、天下、皆、協が文字を識らずして虛しく儀表有るを知り、號して沒字碑と爲すと。又、安叔千、狀貌堂堂として、文字に通せず、爲す所鄙陋なり。時人、之を沒字碑と謂ふ。契丹、京師を犯すとき、迎へて耶律德光を赤岡に見る。德光勞うて曰く、是れ安沒字なりや否やと。並に五代史に見ゆ。

【解】 元以前には、多くは落款を用ひず、或は石のすきまに隱してゐるのもあつた。書が精妙ならずして畫面を損ずることを恐れた爲めである。倪雲林に至つて、書法が遒勁にして超脫してゐたので、或は詩の後に跋を書いたり、或は跋の後に詩を書いたりしてゐた。文衡山は落款の書き方が整うて居り、沈石田は書法が灑落であり、徐文長は詩歌が奇拔縱橫であり、陳白陽は題辭が精妙卓絕であつて、しば〴〵畫面の上に落款を題し、かへつて奇異なる趣味が有る。今日の俚俗野鄙なる畫家は、何にも書かぬ方が善いのである。

煉碟

凡顏色碟子。先以米泔水溫溫煮出。再以生薑汁及醬塗底下。入火煨頓。永保不裂。

【譯】 凡そ顏色碟子は、先づ米泔水を以て溫溫に煮出し、再び生薑汁及び醬を以て底下に塗り、火に入れて煨

頓すれば、永く保つて裂けず。

【註】顔色碟子、繪具皿。○米泔水、米の白水。○煨頓、燒いて置く。

【解】繪具皿は、はじめに米の白水の中に入れてやはらかに煮出し、次に生薑の搾り汁と醬油とを皿の底に塗り、火の中に入れて燒いて置くときは、永く保つて毀れない。

洗粉

凡畫上用粉處黴黑。以口嚼苦杏仁水。洗之一二遍。即去。

【譯】凡そ畫上に粉を用ふる處黴黑せるは、口に苦杏仁を嚼むの水を以て、之を洗ふこと一二遍すれば、即ち去る。

【註】洗粉、胡粉の汚れたるを洗ふこと。○黴黑、かびて黑くなる。○苦杏仁、杏仁は杏の實の中の仁なり。杏仁には甜き者と苦き者とあり。今、其の苦き者をさす。

【解】畫の上に胡粉を用ひた處が黴びて黑くなつたのは、口で苦い杏仁を嚼んだ水を以て一二回洗ふときは、きれいになる。

揩金

凡金箋金扇上。有油不可畫。以大絨一塊揩之。即受墨矣。用粉揩固去油。但終有一層粉氣。亦有用赤石脂者。終不若大絨之爲妙也。

【譯】凡そ金箋・金扇の上に、油有りて畫く可からざるは、大絨一塊を以て之を揩すれば、即ち墨を受く。粉を用ひて揩すれば固より油を去る。但だ終に一層の粉氣有り。亦、赤石脂を用ふる者有り。終に大絨の妙たるに若かざるなり。

【註】揩金、金紙の油氣を拭き取ること。○大絨、びろうど。○揩、こする。○赤石脂、石の風化せる者。濟南・吳郡等の處に產す。鮮紅にして愛す可し。

【解】およそ金紙や金扇の上に、油が浮き出してゐて、畫を書くことが出來ないのは、一切れの天鵞絨で摩擦すると、墨を受け付けるやうになる。胡粉を塗つて摩擦しても油を拔き取ることは出來るが、但しどうしても胡粉の氣が殘つてゐるので困る。赤石脂を用ひる人も有るけれども、天鵞絨を用ひるには及ばぬのである。(今日では炭酸マグネと云ふ散藥で拭くが最も善い。)

礬金

凡金箋金起難畫。及油滑膠滾。畫不上者。但以薄薄輕礬水刷之。即好畫矣。如

好金箋畫完時。亦當上以輕礬水。則付裱無迸裂粘起之患。

【譯】凡そ金箋の金起りて畫き難く、及び油滑に膠滾して、畫き上らざる者は、但だ薄薄の輕礬水を以て之を刷すれば、卽ち畫くに好し。好き金箋の畫き完き時の如きも、亦、當に上すに輕礬水を以てすべし。則ち裱に付するとき、迸裂粘起の患無し。

【註】礬金、金紙に礬水をひくこと。○金起、金がまくれること。○油滑、油がぬらつくこと。○膠滾、膠が吹き出ること。○畫不上、畫くことが出來ぬ。○畫完、畫を書きあげる。○迸裂、さけること。○粘起、はげること。

【解】凡そ金紙の金がまくれて畫き難い者や、油がぬらつき膠がふきでて、畫が書かれぬ者は、ただ薄い輕礬水を引けば、畫が書かれるやうになる。好い金紙であつても、畫を書き終つたときに、輕礬水を引いて置くべきである。さうすれば、裱裝するときに、裂けたり、はげたりする患が無い。

往余侍櫟下先生。先生作近代畫人傳。亦曾問道於盲。有所商榷。余退而成畫董狐一書。自晋唐以迄昭代。或人系一傳。或傳列數賢。客有指爲畫海者。尙剞劂有待。玆特淺說俾初學耳。然亦頗不惜筆舌誘掖。不惟讀書之士。見而了然畫理。卽丹青之手。見而亦皇然讀書。客曰。此有苗格也。余急掩其口。時己未古重陽。新亭客樵識。

【譯】往に余、櫟下先生に侍す。先生、近代畫人傳を作る。亦曾て道を盲に問ひ、商榷する所有り。余退きて畫董狐の一書を成し、晋唐より以て現代に迄るまで、或は人ごとに一傳を系け、或は傳ごとに數賢を列す。客、指して畫海と爲す者有り。尙ほ剞劂、待つ有り。玆に特だ淺說して初學を俾くるのみ。然れども亦頗る筆舌の誘掖を惜まず。惟だ讀書の士見て畫理に了然たるのみにあらず、卽ち丹青の手も、見て亦皇然として書を讀む。客曰はく、此れ有苗格るなりと。余急に其口を掩ふ。時に己未の古重陽、新亭客樵識す。

【註】櫟下先生、清の周亮工、字は元亮、一字は減齋、一に櫟下先生と稱す。河南の祥符の人、材器あり、經濟を善くし、議論を喜み、尤も繪事及び古篆籀法を嗜み、著述數十種有り。○問道於盲、行くべき道を盲人に問ふ。盲とは王安節自ら言ふ、讖辭なり。此句は、韓退之の陳生に答ふる書に、道を盲に求む、とあるに本づく。○商榷、商量するなり。相談すること。○畫董狐、書名。董狐は春秋の時の良史なり。今、畫を論じ人を評すること、皆能く確當にして、私好偏頗無きを言ふなり。○昭代、今日の時代、卽ち清朝をいふ。○畫海、繪畫の事を網羅すること、大海の廣大無邊にして何物をも包容せざる無きが如きを言ふ。○剞劂、印行すること。○誘掖、誘導するなり。誘は前に在りて之を導くなり。掖は傍に在りて之を挾むなり。○有苗格、尙書大禹謨に、帝乃ち誕に文德を敷き、干羽を兩階に舞はす。七旬にして有苗格る。とあるに本

づく。有苗は卽ち三苗にして、はじめ王化に浴せざる蠻族なりしが、帝舜が大に文德を敷きたるに感じ、討伐せざるに自ら來り服せしなり。今、畫家が此書を見て、勸誘するを待たずして、亦自ら喜んで書を讀むに至ることを喩ふるなり。○己未、康熙十八年。○古重陽、九月九日なり。唐の文宗の時、嘗て事繁きを以て、延期して九月十九日を重陽としたることあり。之に對して九月九日を古重陽とするなり。○新亭客樵、王安節の別號。

【解】 先年、余は櫟下先生に從遊してゐたことがある。先生は、近代畫人傳を作られたが、その時にも、先生は、行くべき道を盲人に問ふが如く、余に對して御相談なされた事があつた。余は其後退いて畫董狐といふ書を撰述した。それには、晉・唐より御當代に至るまでの畫家を網羅し、或は一人に就いて一傳を作つたのもあり、或は一傳の中に數人の畫家を載せたのもある。或る人は、これは繪畫の大海であると曰つて稱賛してくれた。けれども此書を印行することは時機を待つて居り、今遽に印行しようと思はぬ。今、玆に述べる所は、たゞ淺薄卑近なる說であつて、初學の人を裨益するに過ぎないものである。けれども、これにも筆舌を惜まずして誘導扶掖して居るのである。ただ讀書の人が此書を讀んで繪畫の理を了解するのみならず、畫家も此書を讀めば喜んで盛に讀書するやうになるであらう。客は曰つた、これは昔有苗が討伐を待たずして自ら來り從つたやうなものであると。余は急に客の口を掩うた。時に己未の歲、古重陽の日、新亭客樵識す。

第一冊　終

301
40

昭和十年五月十五日印刷
昭和十年五月二十日發行

豫約會費
壹圓參拾錢

全譯芥子園畫傳
第一冊總說

編者　小杉放庵
編者　公田連太郎
東京市牛込區喜久井町三四
發行人　北原義雄
東京市豐島區高田南町一丁目一九五
印刷所　美術印刷株式會社
東京市牛込區四五軒町三四
製本所　福山印刷製本所
東京市牛込區四五軒町三四
發賣所　福山書店
電話牛込四三六〇

發行所　アトリエ社
東京市牛込區喜久井町三四
電話牛込六四二一番
振替東京六六〇二番

301
40

終